

二口油免遺跡発掘調査概要

—庄川右岸改修関連住宅団地事業に係る調査—

1998年3月
大門町教育委員会



調査地全景（南から）



1号墳周溝全景

序

豊かな自然に恵まれた大門町の丘陵地や射水平野には様々な遺跡が存在しています。

二口油免遺跡は射水平野の最西端に位置し、平成5年度に県営ほ場整備事業に伴う試掘調査で確認された遺跡です。

当該地は庄川右岸堤防改修事業により移転する住宅の代替地として選定されたことから平成7年度に試掘調査を行いました。結果、事業範囲内約8,800m²の広大な面積全てにおいて埋蔵文化財が確認されました。

保存方法の検討を重ねてまいりましたが、地下での保存が不可能と判断されたため翌8年度より記録保存を目的として本調査を実施しました。

調査では、古墳時代初頭の古墳周溝を始め、様々な遺構・遺物が検出されています。

この報告書は、その成果が地域の歴史の理解や文化財の保護意識の高揚に寄与できることを願ってまとめたものであります。

資料としてご活用頂けたら幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたり多大なご指導を頂きました富山県埋蔵文化財センター、及びご協力を頂きました地元の皆様に心より感謝申し上げます。

平成10年3月

大門町教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町に所在する二口油免遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、庄川右岸改修関連住宅地事業（改良住宅等整備事業・分譲地造成事業）に伴う本調査である。
- 3 調査期間は1996年5月13日～1997年7月31日、調査面積は8,887m²（改良住宅等整備事業1,930m²、分譲地造成事業6,957m²）である。
- 4 調査は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て大門町教育委員会が実施した。調査担当者は下記のとおりである。

大門町教育委員会　社会教育係　学芸員　尾野寺　克　実
同　　　　　　　　　　調査員　中井　英　策

- 5 本書の編集・執筆は、尾野寺・中井が行った。
- 6 発掘調査作業・遺物整理作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 7 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表す。
安念幹倫・池野正男・伊藤降三・上野章・宇野隆夫・久々忠義・黒坪一樹・高梨清志・田中明・塚田一成
辻谷真夕・宮田進一・山口辰一（五十音順・敬称略）
- 8 遺物整理、報告書作成作業の参加・協力者は次のとおりである。
高田紀美代・布目美佳・矢村有紀・富山大学考古学研究室学生

目　　次

巻頭図版

カラー写真

本文

I 序章	1
1. 遺跡の位置と環境	1
2. 調査に至る経緯	2
3. 調査の経過	2
II 調査の概要	3
1. 研究	3
2. 遺構と遺物	3
III まとめ	10
参考文献	11

挿　　図

第1図 位置と周辺の遺跡	1
第2図 基本層序模式図	3
第3図 1号墳	4
第4図 調査全体図	5
第5図 SH100	8
第6図 SK118	9
第7図 SK146	9
第8図 出土遺物実測図（1）	19
第9図 出土遺物実測図（2）	20
第10図 出土遺物実測図（3）	21

第11図 出土遺物実測図（4）	22
第12図 出土遺物実測図（5）	23
第13図 出土遺物実測図（6）	24
第14図 出土遺物実測図（7）	25
第15図 出土遺物実測図（8）	26
第16図 出土遺物実測図（9）	27
第17図 出土遺物実測図（10）	28
第18図 出土遺物実測図（11）	29
第19図 出土遺物実測図（12）	30
第20図 出土遺物実測図（13）	31
第21図 出土遺物実測図（14）	32

表

実測遺物観察表.....12~18

写真図版

写真図版1	33	写真図版6	38
写真図版2	34	写真図版7	39
写真図版3	35	写真図版8	40
写真図版4	36	写真図版9	41
写真図版5	37	写真図版10	42

I 序 章

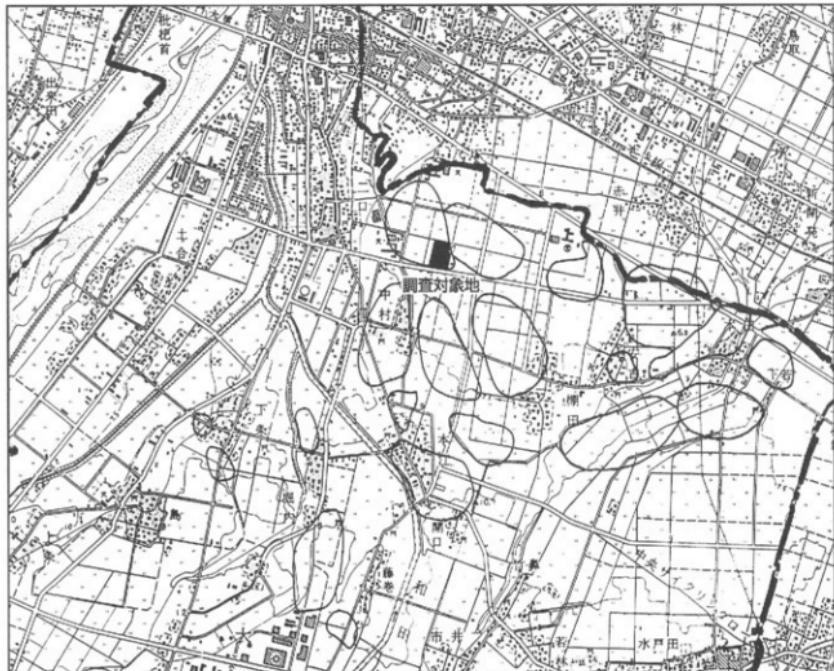
1. 遺跡の位置と環境（第1図）

大門町は、富山県の中央北部、射水平野の南西端に位置し、行政区では東は小杉町、西・南は庄川を挟んで高岡市、北は大島町に接している。地形的には庄川右岸と南北に貫流する和田川の扇状地が大部分を占め、南方には丘陵地が連なる。

今回、発掘調査を行った二口油免遺跡は小杉町を中心として広がる射水平野の西端部、標高7m前後の平坦地に位置する。近辺は南から北へならかに下がる。

周辺には弥生時代～中世の遺跡が密に分布する。特に弥生後期、奈良・平安時代に中心をもつ遺跡が多く見られる。しかし当遺跡のように古墳時代初期に最盛期を持つ事例は周辺ではなく、大門町全体を見まわしても南部の独立丘陵上に位置する国指定史跡「串田新遺跡」のみである（但し、串田新遺跡の場合は当遺跡よりも若干古い様相を持つ）。串田新遺跡は円墳5基に集落が接する例として報告されている（中山1981）。

大門町史によると昭和10（1935）年の耕地整理時、当該地で赤彩を施した高杯等、多くの遺物の出土があったとされている。また、元の土地所有者によると、その耕地整理時に当該地を均平化したが、それ以前は古墳と思しき丘が存在したとされる。



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

2. 調査に至る経緯

建設省は昭和9年の一級河川庄川の大出水や流域の変貌を憂慮し、堤防・護岸等の整備計画を昭和62年策定した。その計画の中で、大門町柳町地区（庄川7.0km付近、大門大橋東側橋詰～和田川合流点）についても堤防が未整備であり、河床も不安定であることから危険地域に指定され、平成6年度より改修事業を行うこととなった。

堤防改修工事による影響を直接受ける柳町と西町の一部は移転を余儀なくされたが、当該地は元来、過小宅地・借地者・高齢者世帯が多い地区で、住民単独での移転は生活再建が容易でなく、生活環境の変化に対して不安がある地区であった。

そこで、大門町は柳町地区の集団移転を行うこととし、生活環境・交通の利便性等を考慮して、中村・二口地内に移転団地を造成することとした。

団地は町営住宅（改良住宅）と宅地分譲を合わせて、さらに児童遊園の整備を行って都市的整備を図るよう計画された。

団地造成用地選定後、大門町都市開発課より同教育委員会に埋蔵文化財包蔵の有無について照会があったが、周囲は平成5年度に行われた祭喰は場整備事業に伴う試掘調査によって埋蔵文化財を確認していたため、当該地についても試掘調査の必要がある旨、回答した。改めて都市開発課より依頼を受けて、平成7年11月27日～30日までの4日間、対象地について試掘調査を実施し、全域で埋蔵文化財の包蔵を確認した。

その結果を元に、都市開発課と教育委員会の二者で協議を行い、平成8年度より用地造成地全面積を対象として、大門町教育委員会が主体となって本調査を実施することとなった。

調査対象面積は改良住宅造成地1,930m²と宅地分譲地6,957m²、合計8,887m²となる。試掘調査の結果から、調査区北側は地山検出面が高く、南側は低くなることから勘案して調査区北端（宅地分譲地となる地区）から順に掘削を行い、南北することとした。

3. 調査の経過

国土地標に基づき、調査対象地全体にわたる10×10mのグリッドを組み、南北方向にX79.950～X80.100、東西方向にY-9.510～Y-9.610を設定した。

平成8年5月13日、重機による表土掘削を開始。前述のとおり、対象地の北側から掘削を開始した。調査面積が8,887m²と広大なため、表土掘削は3回に分けることとし、最初の掘削はX80.011、Y-9.526～X80.028、Y-9.595～対象地北端までについて5月20日まで行った。以降、調査の進展に応じて掘削を行うこととし、第2回目はX79.975、Y-9.536～X79.991、Y-9.603～X80.011、Y-9.526～X80.028、Y-9.595の範囲を同年7月22日から26日までの間実施した。第3回目は対象地南端～X79.975、Y-9.536～X79.991、Y-9.603までを平成9年4月28日から5月29日までの間行った。重機掘削を行った箇所から順次面積査を行って遺構を検出し、検出写真撮影後、掘削を行った。

完掘後、航空写真測量を行ったが、地山は砂質土であり、現場の保持が難しいため撮影についても掘削に合わせて3回に分けて行った。第1回目は平成8年10月17日に実施し、第2回目は平成9年4月21日、第3回目は同年7月30日に行った。

第1回目の掘削時は古墳の周溝が検出でき、遺物が多量に出土したことから慎重に作業を行ったため、大幅に工程が遅れた。その箇所については特に古墳周溝の遺物が多く、その取り上げに手間がかかったため、第2回目の掘削を行った以降も継続して作業を続けている。第2回目の掘削時には掘立柱建物を始めとして、様々な遺構を検出していいる。このころ台風が多く通過し、また天候が不順であったために作業を中止することが度々あった。平成9年度当初に第3回目の掘削を行った。比較的天候が良く、遺構も平成8年度中に調査実施した箇所に比べて少なかったため、遅れていた予定を若干取り戻して、7月末日で調査終了することができた。

7月30日に第3回目の航空写真撮影、その後31日までの2日間、SE170内の井筒やSB43の柱痕を取り上げて調査を終了した。

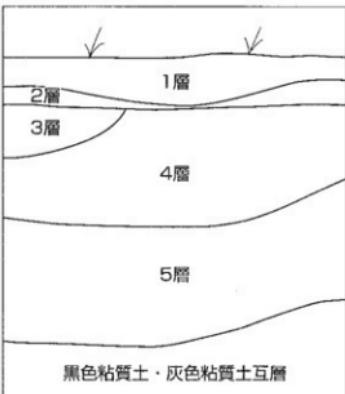
また、7月27日には現地説明会を開いて地元住民等の理解を深めるよう考慮した。

II 調査の概要

1. 層序 (第2図)

基本層序は表層から、1層耕作土、2層床土、3層黒色粘質土、4層黄灰色粘質土、5層青灰色砂土となる。

1層層厚は10~20cm、2層層厚は2~10cmを測る。2層は盛土で、全体に薄く堆積するが、現在の場の高低差を調整するために箇所ごとで一定ではない。3層は古墳時代初頭の遺物包含層である。耕地整理等で全体に削平を受けており、地表面の標高の高い箇所はほとんど遺存せず、低い箇所には良好に遺存する。全体に水分を多く含有し、粘質が強い。層厚は0~22cmを測る。また、X79.990~79.975、Y-9.575~-9.610間にとその周囲は低湿地状になっており、3層がその中に覆土となって入っている。4層は地山で砂質が強く、深度が深まるにつれて強くなり、粘質はほとんどなくなる。4層上面は弥生時代後期~古墳時代初頭の遺構検出面である。加えて、奈良・平安時代の遺構も若干検出している。これはさらに上層、遺存していれば3層直上に堆積していたであろう地山から掘りこまれたもので、削平のため検出面が同一になったものと考えられる。



第2図 基本層序模式図

事前の試掘調査や部分的な深堀による確認のみであるが、4層の層厚は30cm~50cmを測る。5層は粒子の細かい砂土で、湧水点である。層厚は50cm前後。5層下は黒色粘質土と灰色粘質土の互層となっている。黒色粘質土は10~20cm、灰色粘質土は10~50cmを測る。両層とも水分を多く含有する。また、黒色粘質土は植物遺体を包含し、古墳時代以前は低湿地状の地形であったと考えられる。地下約3mのレベルまで深掘を行い、互層が少なくとも3対は堆積することを確認している。

2. 遺構と遺物

調査区全体で、古墳時代初頭の遺構を中心に多く検出した。検出遺構には弥生時代後期~古墳時代初頭のものは溝・掘立柱建物・井戸・土坑・穴を確認した。奈良・平安時代では井戸・土坑を検出している。覆土は弥生時代後期~古墳時代初頭のものでは、単層のものは全て黒色粘質土が入り、奈良・平安時代のものは暗褐色粘質土が入る。

全体的に地形を見ると、ほぼ均平な平地である。

標高は7.20~7.40mであるが、X79.990~79.975、Y-9.575~-9.610間にについては低湿地状の地形になっており、最深部で周囲から約50cm下がる程度であるが、その覆土には多量の遺物が包含している。

また出土遺物は、古墳時代初頭に位置付けられるものがそのほとんどを占め、平安時代のものが若干の遺構と床土から見られた。

以下、時代ごとに主要な遺構の概要、及び遺物について特徴的なものについて記す。

弥生時代後期～古墳時代初頭

1号墳（第3、8～11図） X80.052～80.079、Y-9.543～-9.572の間で検出した区画溝である。一辺につき長さ19m、幅1.5m前後を測る。深度は70～120cmと場所によって大きく変わる。また、Y-9.554～-9.560間は特に浅くなり30～40cmとなる。埋土は褐色・灰色系の粘質・シルト質の土層が見られる。断面形は若干不整ではあるが、逆台形を呈しており、最低でも3回の掘り直しが確認できる。

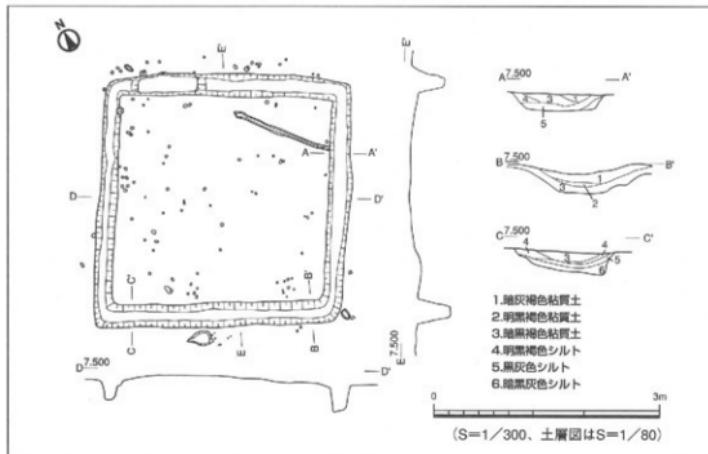
区画溝の内側は溝や穴が見受けられるが、これらは後世のものと考えられる。地元の住民より聞き得た話では昭和10年に行われた耕地整理以前にはこの地点には墳丘が存在しており、現在主体部と考えられる墳丘は消失しているが、今回検出した溝状遺構はその方墳の周溝と考えられる。

出土遺物は多量の土師質土器が出土している。前述のとおり、層序から複数回の掘り直しが確認でき、遺物の比定時期も白江式～古府クルビ式と若干幅を持つ。

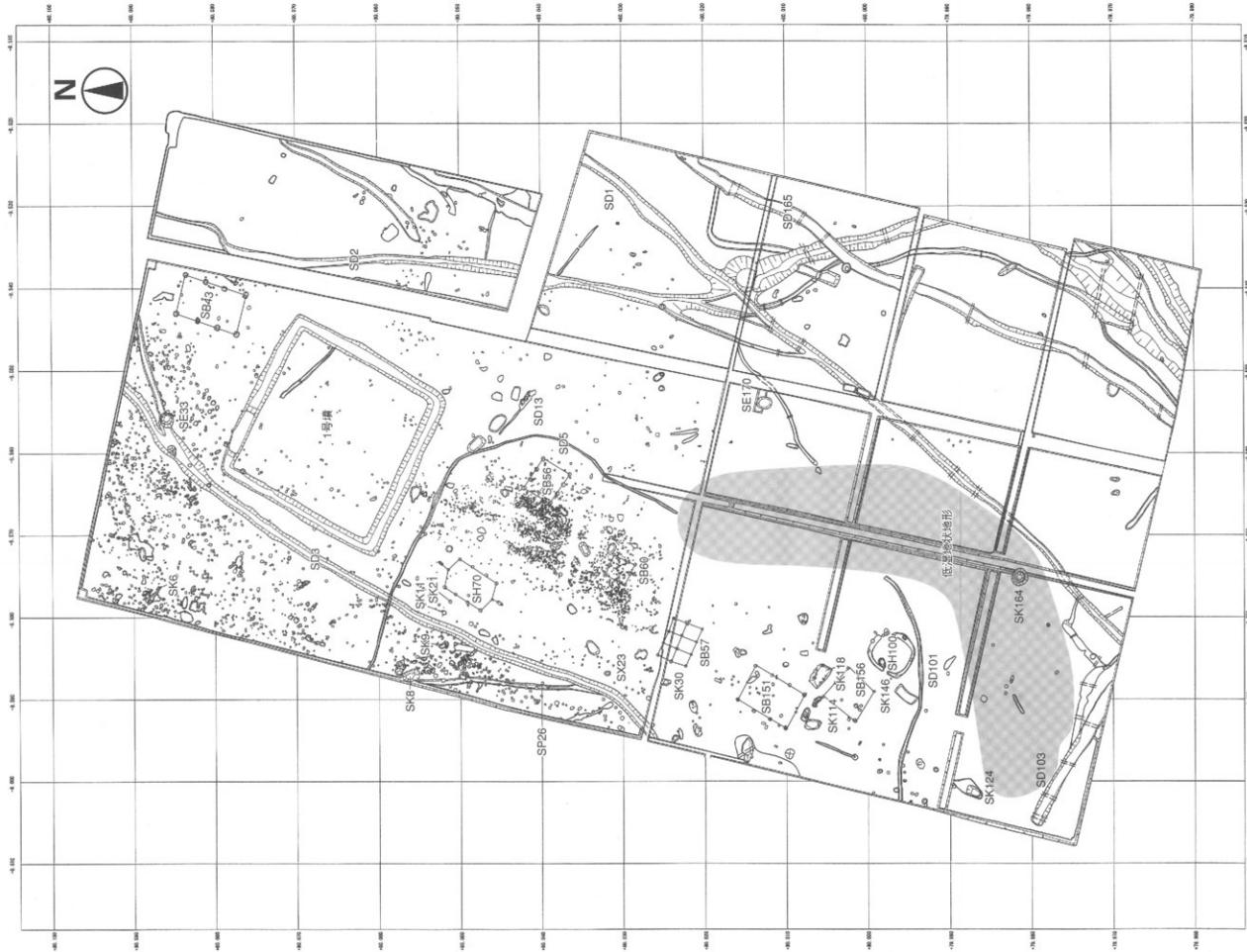
壺形土器（1～12）については、二重口縁を持つもの、内外面にミガキを施すもの、赤彩を施すものが目立つ。また、口縁帯に貼付突帯をもつもの（2）、体部に穿孔を持つもの（12）と特徴的なものも出土している。

甕形土器（13～25）については、口縁端部を面取りするもの（13・14・24）や口縁帯が内済して立ち上がり、端部内面にふくらみを持つもの（15）が数点入る。調整については、外面にはハケ調整を施すものがほとんどであるが、タタキを施すもの（23）も見られた。内面については、ハケ調整を施すのが多く、削り調整を施すものも数点見られた。全体に煤が付着しているものが多い。

高杯形土器（26～35）は全体に丁寧な作りのものや赤彩品が多い。器台形土器（36～45）についても丁寧に磨かれ、赤彩を施すものが多い。杯部には内面に暗文を持つもの（37）を確認できた。脚部には穿孔を持つものが多いが、中でも縱に4個×5方向から穿かれたと考えられるもの（43）、縦に2個×3方向から穿かれたと考えられるもの（45）が目を引く。鉢形土器（46～53）は赤彩品が多く、ミガキや削りによって丹念に成形されたものがほとんどで、台杯鉢（53）も見られる。また、有孔鉢形土器（54）、石製品（55・56）も出土している。



第3図 1号墳



第4図 調査全体図 ($S=1/400$)

S D 1 (第4, 21図) X79.968~80.034, Y-9.524~-9.585の間で検出した溝。幅130~150cm, 深度は30cm前後を測る。埋土は下層に黒色粘質土、上層に暗褐色粘質土があり、下層では古墳時代の土師質土器が出土している。また、上層では飛鳥時代の須恵器の杯蓋(205)が出土している。

S D 2 (第4, 12図) X79.990~80.087, Y-9.531~-9.538の間で検出した溝。X80.004でS D 165に、X80.013でSD 1にそれぞれ切られる。X80.020~80.025で2本の流路が合流する。幅は100cm~200cmと場所によって大きく変わり、深度は30~50cmを測る。出土遺物の中に皮袋形土製品(57)も見られるが、土器については遺存状況が悪く、図化できたものも高杯形土器の脚部(58)のみで時期を特定できるものは出土していない。

S D 3 (第4, 12・13図) X80.027~80.091, Y-9.545~-9.595の間で検出した溝。X80.087付近で2本に分岐する。幅120cm~230cm、分岐点付近で最大幅280cm、深度28~51cmを測る。

土器質土器が多量に出土しているが、壺形土器(59~62)、高杯形土器・器台形土器(78~82)は少なく、壺形土器(63~76)が多く出土している。壺形土器には口縁端部を面取りするもの(73)が見られた。また、出土点数は少ないが蓋形土器(77)、鉢形土器(83・85)、有孔鉢形土器(84)も確認できた。出土遺物全体で比定できる時期は古府クルビ式が中心になると考えられる。

S D 5・S D 101 (第4, 13・14図) X80.023~80.091, Y-9.560~-9.587の間と、X79.994~79.999, Y-9.603~-9.575の間で検出した溝。梢円を描くように西側を囲んでおり、住居区のエリアを示す区画溝であったと考えられる。X79.999~80.023の間は前述した低湿地状の地形に切られており検出できなかった。幅30~50cm、深度は10cm前後を測る。底部は凹凸が激しいため、水路として使用したものではなく横列のための溝であった可能性があると考える。

出土遺物は壺形土器(86~88・91~93)、壺形土器(89・90)、高杯形土器・器台形土器(94~97)、蓋形土器(98)、鉢形土器(99)と多様なものが出土しており、これらは古府クルビ式が中心の時期と考えられる。

S D 13 (第4図) X80.041~80.046, Y-9.552~-9.558の間で検出した溝。幅25~70cm、深度10cm前後を測る。遺物は出土していない。

S D 103 (第4, 15図) X79.970~79.981, Y-9.592~-9.607の間で検出した溝。幅150~175cm、深度10~25cmを測る。低湿地状の地形の南端部に平坦な地形との境界線となるように流れている。

出土遺物は壺形土器(100)、ミニチュア土器(101)、他に図化出来なかつたが、壺形土器で口縁帯が内湾して立ち上がり端部内面にふくらみを持つもの、体部外面にタタキを持つもの等が出土している。

S E 33 (第4, 15図) X80.086, Y-9.556を中心とし、最大径185cm、最大深度88cmを測る井戸。平面形は隅丸方形を呈し、SD 3を切っている。出土遺物には壺形土器(103)がある。

S B 56 X80.036~80.042, Y-9.560~-9.567で検出した掘立柱建物。2×3間の規模であるが、短軸の中間に柱穴を確認できなかつた。柱穴の直径は45~60cmを測り、平面形はそれぞれ円形~梢円形を呈する。遺物は出土していない。

S B 60 (第4, 15図) X80.029~80.034, Y-9.507~-9.573の間で検出した掘立柱建物。2×2間の規模であるが、東軸の中間に柱穴は検出できなかつた。柱穴の直径は30~50cmを測り、平面形はそれぞれ円形を呈する。出土遺物には壺形土器(102)等がある。

S B 70 (第4図) X80.045~80.052, Y-9.572~-9.578の間で検出した掘立柱建物。2×3間の規模で北・南側に棟持柱を持つ。柱穴の直径は35~45cmを測り、平面形は隅丸方形若しくは円形を呈する。短軸中央の柱穴はそれぞれ若干外側に張り出している。棟持柱痕は北側で長径約85cm、南側で約65cmを測り、短径約60cmを測る。平面形は梢円形を呈する。遺物は出土していない。

S B151 (第4図) X80.008~80.016, Y-9.586~-9.594の間で検出した掘立柱建物。2×3間の規模であるが、短軸北側の中間は柱穴を確認できなかった。柱穴の直径は25~54cmを測り、平面形は円形を呈す。遺物は出土していない。

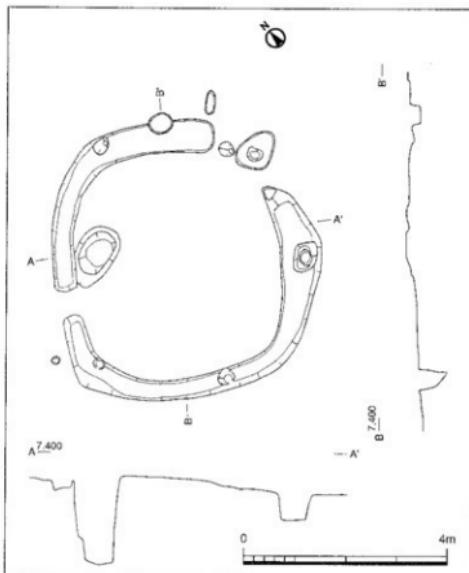
S H100 (第5, 15図) X79.995~80.000, Y-9.581~-9.588の間で検出した平地式建物。

周溝の平面形は隅丸方形を呈し、規模は一辺4.2m前後を測る。幅50~80cm、最大深度10cmを測り、断面形は方形を呈する。周溝の内側には柱穴は見られないが、規模、及び周溝の形状で住居と判断した。

浅い溝ではあるが、土師質土器が一括で多量に出土し、これらの時期は古府クルビ式が中心と考えられる。固化できる遺物は少なかったが、壺形土器(104~106)、甕形土器(107~109)、高杯形土器・器台形土器(110~112)等が出土している。また、甕形土器には口縁帶が内湾して立ち上がり、端部内面にふくらみを持つもの(109)が見られた。

S K 6 (第4, 15図) X80.089, Y-9.576を中心とする土坑。平面形は不整な楕円形を呈し、長径は最大で265cm、短径は35cm前後、最大深度は22cmを測る。

出土遺物は甕形土器(112)、壺形土器(113)が出土し、時期は古府クルビ式が中心と考えられる。



第5図 SH100 (S=1/100)

S K 8 (第4, 16図) X80.057, Y-9.587を中心とする土坑。平面形は楕円形を呈し、最大長215cm、短径135cm、深度は42cmを測る。出土遺物には甕形土器(114・115)、高杯形土器・器台形土器(116~118)等がある。

S K 9 (第4, 16図) X80.052, Y-9.584を中心とする土坑。平面形は楕円形を呈し、長径85cm、短径60cm、深度は15cmを測る。出土遺物には器台形土器(119・120)があり、固化出来なかつたが赤彩を施したものも確認している。

S K 10 (第4, 16図) X80.050, Y-9.583を中心とする土坑。平面形は不整な長方形を呈し、長径256cm、短径80cm、深度は5cmを測る。出土遺物には高杯形もしくは器台形土器(121)、他に器種は不明であるが赤彩を施したものが出土地していている。

S K 11 (第4, 16図) X80.052, Y-9.579を中心とする土坑。平面形は台形を呈し、最大長52cm、深度は10cmを測る。出土遺物には鉢形土器(122)が出土している。

S K 21 (第4図) X80.052, Y-9.578を中心とする土坑。平面形は円形を呈し、直径40cm前後、深度は46cm前後を測る。遺物は固化出来なかつたが、土師質土器が出土している。

S K 114 (第4, 16図) X80.007, Y-9.590を中心とする土坑。平面形は不整な長方形で、長径は最大で165cm、短径65cm、深度22cmを測る。遺物は甕形土器(123)、他に固化出来なかつたが甕形土器等が出土している。

SK118 (第6, 16・17図) X80.007, Y-9.587を中心とする土坑。平面形は不整な長方形で、最大長285cm、短径180cm、深度52cmを測る。

出土遺物は一括資料で、壺形土器(124~128)、甕形土器(129~139)、高杯形土器・壠台形土器(140~144)、鉢形土器(145~148)等が多量に出土し、時期は白江式が中心である。壺形土器には口縁部に貼付突帯をもつもの(125)も見られ、甕形土器には口縁端部を面取りするもの(132)、口縁帯が内湾して立ち上がり、端部内面にふくらみを持つもの(136)が見られる。

SK124 (第4, 18図) X79.991, Y-9.602を中心とする平安時代の土坑。平面形は隅丸三角形で、最大幅395cm、最短幅195cm、深度20cmを測る。低湿地状の地形が立ちあがりきった平地部との境のラインに位置する。

出土遺物は一括資料で、甕形土器(149~156)、高杯形土器(157)、壠台形土器(158~161)、鉢形土器(162)等が多量に出土し、白江式が中心である。甕形土器には口縁端部を面取りし、体部外面にタタキを持つもの(152)が見られる。

SK146 (第7, 19・20図) X79.997, Y-9.588を中心とする土坑。平面形は隅丸長方形で、長径275cm前後、短径110cm前後、深度33cmを測る。

出土遺物は一括資料で、甕形土器(163~180)、高杯形土器(181~183)、鉢形土器(184~186)等が多量に出土し、それらは白江式が中心時期となる。甕形土器には口縁帶が内湾して立ち上がり、端部内面にふくらみを持つもの(174~176)が見られる。

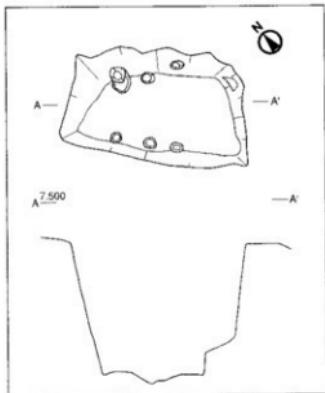
SK164 (第4, 20・21図) X79.969, Y-9.552を中心とする土坑。平面形は楕円形で最大長145cm、深度20cmを測る。SK124と違い、こちらは低湿地状の地形の立ちあがり際に位置する。人為的な掘りこみと認められるので土坑として認識しているが、上半部は低湿地状の地形に切られている。

出土遺物は一括資料で、壺形土器(187~190)、甕形土器(191~198)、高杯(199~202)、鉢(203)等が多量に出土し、時期は白江式が中心となる。甕形土器には口縁端部を面取りするもの(191・192)、口縁帶が内湾して立ち上がり、端部内面にふくらみを持つもの(197)が見られる。

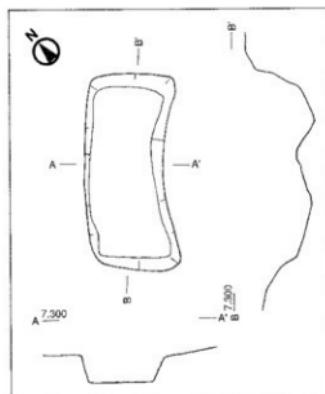
SP26 (第4, 21図) X80.040, Y-9.589を中心とする土坑。平面形は円形で、最大径30cm、深度16cmを測る。出土遺物には口縁帶が内湾して立ち上がり、端部内面にふくらみを持つ甕形土器(204)がある。

平安時代

SD165 (第4, 21図) X79.962~80.023, Y-9.523~9.557の間で検出した溝。幅150cm前後、深度15~35cmを測る。遺物は回転糸切り痕を持つ土師質土器の無台杯(206)、他に國化出来なかつたが、須恵器の双耳瓶が出土している。



第6図 SK118 (S=1/80)



第7図 SK146 (S=1/80)

S B 43 (第4図) X80.077～80.086, Y-9.538～-9.545で検出した掘立柱建物。2×3間の規模であるが、短軸中間の柱穴は検出できなかった。柱穴の直径は55～75cmを測り、平面形は方形・長方形を呈し、柱根が残るものも5基確認した。遺物は出土していない。

S B 57 (第4図) X80.021～80.026, Y-9.580～-9.586で検出した掘立柱建物。2×3間の規模で、柱穴の直径は35～65cmを測り、平面形は不整円形を呈する。遺物の出土はない。

S B 156 (第4図) X79.999～80.005, Y-9.587～-9.594の間で検出した掘立柱建物。2×2間の規模であるが、短軸北側の中間は柱穴を検出できなかった。柱穴の直径は28～33cmを測り、平面形は方形を呈す。遺物は出土していない。

S K 30 (第4, 21図) X80.025, Y-9.562を中心とする土坑。平面形は円形を呈し、直径は60cm、深度は35cmを測る。底部に回転糸切り痕を持つ須恵器の無台杯(207)が出土している。

S E 170 (第4, 21図) X79.982, Y-9.575を中心とする井戸。平面形は梢円形を呈し、長径は235cm、短径195cm、深度26cmを測る。瓦質土器の羽釜(208・209)が出土している。

S X 23 (第4図) X80.032, Y-9.562を中心とする不明造構。平面形は梢円形を呈し、長径90cm、短径30cm、深度約5cmを測る。遺物の出土はない。

III まとめ

これまで主要な遺構の紹介のみに止まつたが、今回調査区における二口油免遺跡を観察してきた。ここでは、今回調査で知り得たことや今後の課題等を箇条書きにしてまとめに変えたい。

1. 今回調査で確認した主な遺構の時期は白江式～古府クルビ式に比定できる。

2. 墓丘は消失しているが、周溝の形状より方墳と認められる古墳を確認した。周溝の規模は一边の長さ約19m、幅1.5m前後を測る。周溝内の遺物から古墳時代前期の所産であると考えられるが、この時期のものとしては規模が大きく、富山県では高岡市桜谷古墳群に次いで2例目となるが、平地に造成されたものである。

また、若干の削平を考慮する必要があり、全体に周溝の深度は均一ではないのだが、特に北側角部の東側約6m幅間の深度は30～40cmと極端に浅く墓道として使用された可能性もある。

出土遺物から古墳築造の上限は白江式である。古府クルビ式の遺物が多く混り、掘り直しも確認できたことから、長い期間にわたって祭りの場となっていたと考えられる。

3. 古墳南側に隣接して区画溝を持つ集落群が構成されている。区画溝・建物址の基軸方向は1号墳に準じたものとなっている。

各遺構の出土遺物の年代から、1号墳築造時には集落は若干離れた箇所にあり、築造後しばらく後に集落を形成するようになったと考えられる。

区画溝内側で検出した建物址は掘立柱建物、棟持柱を持つ掘立柱建物、区画溝を持つ半地式建物と多様な形状のものが確認できた。削平等の影響でこの区间に存在した全ての建物を確認したとは思えず、それらを考慮に入れると住居や倉庫等の様々な性格の建物が立ち並んでいたと推察する。

4. 今回調査区は、全体的な地形は平坦な平野の一部であるが、X79.990～79.975、Y-9.575～-9.610間については低湿地状の地形になっている。この区間については多量の遺物が埋土に包含され、集落の廃棄場になっていたと考えられる。紙面の都合上、図化はしていないが、それらは古府クルビ式のものが多い傾向にある。しかしながら、低湿地状の地形で包含層下で検出したSK124、SK164の出土遺物については白江式が中心になると考えられ、若干の時期差を持つ。もともとはSK118やSK146等と一体の意味を持つ区域であったこの地区が、前述した区画溝を持つ集落形成後に、若干地山のレベルが低いために廃棄場として位置づけられるようになったと考える。

5. 今回、新たに7世紀前半に比定される杯蓋が出土した。平安時代の遺物も所々で出土し、当該期のものと考えられる流路、建物址等を調査区内で確認している。

ここで確認した平安時代の遺構は9世紀代、12世紀代に比定できるものであるが¹、9世紀代に属する遺構については周辺の試掘調査で遺構・遺物とも確認されており、その広がりと考えられる（大門教育委員会1997）。しかし、7世紀代、及び12世紀代の遺構については大門東部地区では確認例がなく、今後、周辺の調査を行う際に集落の存在等を留意して行なわなければならない。

参 考 文 献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡Ⅰ』
石川県立埋蔵文化財センター 1995 『谷内・杉谷遺跡群』
金沢市教育委員会 1996 『西念・南新保遺跡Ⅳ』
上市町教育委員会 1984 『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品・總括編－』
上市町教育委員会 1982 『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編－』
大門町 1981 『大門町史』
大門町教育委員会 1981 『串田新遺跡Ⅱ』
大門町教育委員会 1981 『串田新遺跡Ⅲ』
大門町教育委員会 1997 『大門東部地区埋蔵文化財発掘調査報告－県営は場整備事業に伴う試掘調査報告－』
富山県文化振興財団 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1990 『布目沢北遺跡発掘調査概要』
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1991 『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（1）
－布目沢東遺跡・布目沢北遺跡－』
富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会 1992 『大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（2）
－布目沢北遺跡第3次調査－』
富山市教育委員会 1987 『長岡杉林遺跡－富山県富山市長岡杉林遺跡発掘調査報告書－』
谷内尾晋司 1983 『北加賀における古墳出現期の土器について』 『北陸の考古学』 石川考古学研究会
吉岡康暢 1991 『日本海域の土器・陶磁』 六興出版

実測遺物観察表

団体番号	遺物番号	種類	種	外径	高さ	口径	内面調査	特記事項	
								外側調査	内側調査
8	1 SX4	彫形土器	彫形土器	10.6		10.6	口縁ミガキ	口縁ハケ後ミガキ	口縁管に貼付突起
	2 SX4	彫形土器	彫形土器	15.1		15.1	ナゲ	ナゲ	
	3 SX4	彫形土器	彫形土器	17.2		17.2			
	4 SX4	彫形土器	彫形土器	13.0		13.0	ミガキ	ミガキ	
	5 SX4	彫形土器	彫形土器	17.2		17.2	ハケ後ミガキ	ミガキ	ミガキ
	6 SX4	彫形土器	彫形土器	22.5		22.5	ミガキ	ミガキ	ミガキ
	7 SX4	彫形土器	彫形土器	26.8		26.8	ハケ	口縁ミガキ、体感ハケ	口縁内外面赤彩
	8 SX4	彫形土器	彫形土器	23.2	36.2	7.8	口縁ナラ後ハケ、体感付位ミガキ	口縁ナラ後ミガキ、体感付ナゲ	内外面焼付有
	9 SX4	彫形土器	彫形土器	23.0		23.0	ミガキ	ミガキ	
	10 SX4	彫形土器	彫形土器	12.3		12.3	ミガキ	ミガキ	
	11 SX4	彫形土器	彫形土器	12.0		12.0	体感ミガキ	口縁ミガキ	全面赤彩
	12 SX4	彫形土器	彫形土器	14.6		14.6	ミガキ	前り	全体穿孔1、外腹赤彩
	13 SX4	彫形土器	彫形土器	18.0		18.0	彫品ナデ、口縁・体感ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部削り	口縫部削り
	14 SX4	彫形土器	彫形土器	21.6		21.6	ナゲ	ミガキ	口縁ナデ、体感ナデ
	15 SX4	彫形土器	彫形土器	17.8		17.8	ナゲ	ミガキ	口縁ナラ後ナデ、体感ハケ
	16 SX4	彫形土器	彫形土器	16.2		16.2	ナゲ	ミガキ	口縁ナラ後ナデ、体部削り
	17 SX4	彫形土器	彫形土器	18.4		18.4	ナゲ	ナゲ	口縁ハケ後ナデ、体感ハケ
	18 SX4	彫形土器	彫形土器	21.2		21.2	ナゲ	ナゲ	口縁ハケ後ナデ、体感ハケ
	19 SX4	彫形土器	彫形土器	11.2		11.2	体感ハケ	ミガキ	内外全面赤彩、内面焦げ
	20 SX4	彫形土器	彫形土器	20.5		20.5	ナゲ	ナゲ	内外全面赤彩
	21 SX4	彫形土器	彫形土器	16.0	16.7	16.2	ナゲ	ナゲ	外腹全面・内面赤燒付有
	22 SX4	彫形土器	彫形土器	14.8	17.5	14.8	タタキ後ハケ	ミガキ	外腹全面・内面赤燒付有
	23 SX4	彫形土器	彫形土器	15.6		15.6	口縁ハケ後ナデ、体感ハケ	ミガキ	内面底部赤燒付
	24 SX4	彫形土器	彫形土器	15.8		15.8	体感ハケ	ミガキ	口縫部赤燒付、外腹赤燒付
	25 SX4	彫形土器	彫形土器				口縁ハケ後ナデ、体感ハケ	ミガキ	
	26 SX4	彫形土器	彫形土器				彫品ミガキ後ナデ、脚部ミガキ	ミガキ	
	27 SX4	彫形土器	彫形土器				7.4	ミガキ	全面赤彩
	28 SX4	彫形土器	彫形土器				11.4	ミガキ	ナゲ
	29 SX4	彫形土器	彫形土器				11.0	ミガキ	
	30 SX4	彫形土器	彫形土器				11.0	ミガキ	ナゲ

固形物番号	通称	種類	規格	口径	高さ	外観圖面	内観調査		特記事項
							前部	後部	
31	SX4	高杯毛土器	9.1	9.0	11.2	口縁ナメ、脚部削り	脚部丸孔3方向	脚部丸孔4方向	
32	SX4	高杯毛土器	11.8	11.8	11.8	口縁ナメ、脚部削り	脚部丸孔3方向	脚部丸孔4方向	
33	SX4	高台形土器	14.0	8.5	9.2	口縁削り後ナメ	口縁削り後ナメ、脚部ナメ	口縁削り後ナメ	
24	SX4	高杯毛土器	17.2	10.5	9.2				
35	SX4	高杯毛土器	22.7						
11	SX4	高台形土器	8.2	7.2	11.8	口縁ナメ、脚部ハケ	ナメ、脚部付け根しづらぎ	口縁外側削り痕、内面磨光	
37	SX4	高台形土器	8.3	7.2	11.8	ナメ	ナメ、脚部付け根しづらぎ	ナメ、脚部後ナメ	
38	SX4	高台形土器	9.1	7.7	10.6	ミガキ	ナメ後ナメ	脚部丸孔3方向	
39	SX4	高台形土器	9.1	7.5	11.8	ミガキ	脚部ハゲ後ナメ	脚部丸孔3方向	
40	SX4	器台形土器	12.5	7.8	12.6	ミガキ	脚部ミガキ、開底ハゲ	脚部ミガキ、開底ハゲ後ナメ	
41	SX4	器台形土器	9.7	14.0	9.1	脚部ミガキ、脚部ハケ後ナメ後ナメ	脚部ミガキ、脚部ハケ後ナメ	脚部ミガキ、脚部ハケ後ナメ	
42	SX4	器台形土器	9.5	8.2	12.2	ナメ後ミガキ、底面部近ナメ後ミガキ	ナメ後ミガキ、脚部ハケ	脚部丸孔3方向	
43	SX4	器台形土器			13.6	ミガキ	ミガキ	脚部丸孔4方向	
44	SX4	器台形土器							
45	SX4	器台形土器							
46	SX4	粒毛土器	10.6	6.3	4.5	ミガキ	ナメ後ミガキ	外曲赤彩、脚部穿孔縫2×3方向	
47	SX4	粒毛土器	11.6	4.8		口縁ナメ、底面部削り	口縁ミガキ、底面部削り	全面赤彩、外側に穿孔入り	
48	SX4	粒毛土器	12.5	4.5		口縁ナメ、底面部削り	口縁ミガキ、底面部削り	外曲赤彩	
49	SX4	粒毛土器	12.7	5.2		口縁ミガキ、底面部削り	口縁ミガキ、底面部削り	全面外側指壓压痕	
50	SX4	粒毛土器	15.9	6.5		ミガキ	ミガキ		
51	SX4	粒毛土器	15.6	6.6	5.3	ミガキ	ミガキ		
52	SX4	粒毛土器	14.8	7.4		ミガキ	ミガキ		
53	SX4	粒毛土器	19.0	9.9		口縁ナメ、底面部削り	口縁・底面部ミガキ、底面部ハケ後ナメ	底面部孔	
54	SX4	粒毛土器	15.2	10.0	7.7	ナメ後ミガキ	ナメ後ミガキ	台付	
55	SX4	石製品				最大長23cm、最大幅4cm、最大厚1.0cm	褐色堅岩、堅先端鋭角の骨工具類品		
56	SX4	石製品				最大長19cm、最大厚0.4cm	滑石滑動板		
12	S7	土製品				最大長12.5cm、最大幅6.0cm、外側にミガキ	皮袋状土製品		
36	SU2	高杯毛土器			12.9	ミガキ	ミガキ		
39	SU3	高杯毛土器	17.0			ミガキ	ミガキ		
60	SU3	高杯毛土器	15.8			ミガキ	ミガキ		

医療器手 清掃番号	清掃	種	規	口径	器端	底径	外面測量	内面観察	特記事項
61	SD3	彫形土器		10.0			ミガキ ハゲ		
62	SD3	彫形土器		14.0			ハゲ		
63	SD3	彫形土器		15.0			ハゲ		
64	SD3	彫形土器		18.0			口縁ハゲ、体部ナデ ハゲ後ナデ	口縁ナデ、体部削り	口縁削り頭頂
65	SD3	彫形土器		13.0					
66	SD3	彫形土器		12.4			ハゲ	ナデ	
67	SD3	彫形土器		17.0			ナデ	ハゲ	
68	SD3	彫形土器		20.0			ハゲ		
69	SD3	彫形土器		18.0			ハゲ		
70	SD3	彫形土器		20.0			ハゲ		
71	SD3	彫形土器		15.8			ハゲ		
72	SD3	彫形土器		22.0			ナデ	ミガキ	口縁端部削り、外端運付管
73	SD3	彫形土器		21.4					
74	SD3	彫形土器		23.0			ハゲ		
75	SD3	彫形土器		18.2			ハゲ		
76	SD3	彫形土器		16.4			ハゲ		
77	SD3	彫形土器		22.6			4.2	2.5	
78	SD3	高杯土器		17.4			ナデ		
79	SD3	高杯土器		16.2			8.0	12.6	頭部外側、脚部ミガキ
80	SD3	高杯土器		11.8			11.8	ミガキ	脚部外側、脚部穿孔 3 万箇
81	SD3	高杯土器		17.0			14.4	ミガキ	
82	SD3	高杯土器		17.0				ハゲ	
83	SD3	彫形土器		9.2			4.6	3.8	
84	SD3	彫形土器		15.6			9.9	0.8	ナデ
85	SD3	彫形土器		23.0			14.5	2.8	ミガキ
86	SD5	彫形土器		14.8					内面水彩
87	SD5	彫形土器		11.4			11.4	ミガキ	内面水彩
88	SD5	彫形土器		10.6			13.4	14.1	体部ハゲ 口縁・頭部ミガキ、体部削り後ハゲ
89	SD5	彫形土器		15.0					外面部付着
90	SD5	彫形土器		15.0			14.0	2.0	口縁ナデ、頭部ハゲ ハゲ後ナデ
									外面部付着

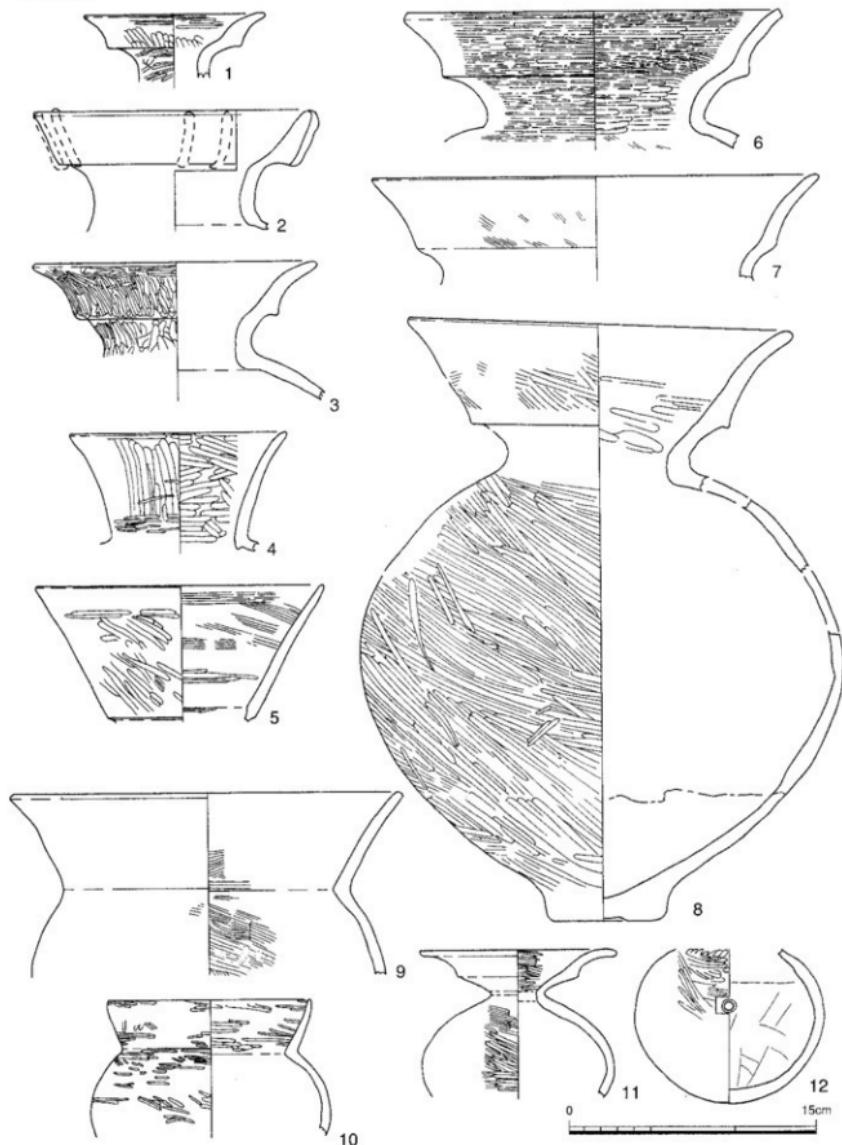
國版番号	遺物番号	通称	種	類	口径	器高	底径	外側開口		内面調整	特記事項
								ハゲ	ハゲ		
91	SD5	彫形土器				7.6	ハゲ				外側底部指標打孔
92	SD5	彫形土器				7.2	ハゲ後ミガキ				底部外面指標打孔、焼付層
93	SD5	彫形土器				7.6	ハゲ				外部焼付層、底面部付
94	SD5	窯形土器				10.3	ミガキ		ハケ後ミガキ		外面赤彩
95	SD5	窯形土器			7.6	7.7	11.0	ミガキ			
96	SD5	窯形土器			8.0	7.6	10.9	ミガキ			
97	SD5	窯形土器			12.4	8.4	12.6	ミガキ			
98	SD5	彫形土器				2.8	ミガキ		ハゲ		
99	SD5	彫形土器					彫形ミガキ、体部ハゲ				
15	SD103	彫形土器				7.2	ハケ後ミガキ		彫部削り、体部ハゲ		外側付着
101	SD103	彫形土器			5.0	3.5	2.0	上半部ナデ、下半部削り	ハケ後ナデ		
102	SB60	彫形土器			16.6			彫形ミガキ、頭部ナデ			
103	SE33	彫形土器				3.8	ハゲ		ハゲ		
104	SH100	彫形土器			17.2				門縁ハゲ、体削り		
105	SH100	彫形土器				4.8	ミガキ		ハケ後ミガキ		内外側赤彩
106	SH100	彫形土器				2.4	ミガキ				
107	SH100	彫形土器			18.5			「横」ハゲ			
108	SH100	彫形土器			20.0			ハゲ			
109	SH100	彫形土器			21.4			ナデ			
110	SH100	彫形土器			8.6			彫形ミガキ、頭部ハケ後ミガキ、胸部ミガキ			
111	SH100	彫形土器			8.6	7.7	13.2	ミガキ	ハゲ		
112	SK56	彫形土器			20.2			「横」ナデ。体憑ハゲ			
113	SK6	彫形土器			12.6			ミガキ			
16	114	SK8	彫形土器		8.5			ミガキ			
						6.6	ミガキ		ナデ		
									ミガキ		
									ハゲ		
						9.8				胸部穿孔4方向	
						13.0				胸部穿孔3方向	
										胸部上半部削り、下半部ハゲ	
										ナデ	
										胸部上半部削り、下半部ハゲ	
										胸部穿孔3方向	

既版番号	測量番号	遠端	鏡	輪	口径	器内	底座	外側測量	内側測量	特記事項
121	SK10	高野士器	圓形十槽		11.5	6.1		ハド後ミガキ		
122	SK21	林毛士器						ミガキ	ミガキ	
123	SK14	鏡形土器						ハ少後ミガキ	隅り	体部・平底側原瓦風
124	SK18	鏡形土器			15.3			ミガキ	ミガキ	
125	SK18	鏡形土器			21.6			ハケ		内外面系影、口縁部に斜け突起
126	SK18	鏡形土器							隅り後ミガキ	
127	SK18	鏡形土器			17.0			ミガキ	ハケ	
128	SK18	鏡形土器				6.0			ハケ	
129	SK18	鏡形土器			12.1	16.1		ハケ	口縁ハテ後ナデ、体部削り	内側側面付着
130	SK18	鏡形土器			13.0	14.5	1.2	ハケ	ハケ	内側側面付着
131	SK18	鏡形土器			12.0			ハケ	口縁ハテ	内外面側付着
17	SK2	鏡形土器			20.0			ハケ	ハケ	口縁部面取り、外側側面付着
133	SK18	鏡形土器			17.8			ハケ		外面側面付着
134	SK18	鏡形土器			17.6			口縁・頭部ハテ後ナデ、体部ハテ		
135	SK18	鏡形土器			18.8			ハケ	口縁ハテ、体部削り	外面側面付着
136	SK18	鏡形土器			16.6			口縁ナデ、体部ハテ	体部ハテ	外側側面付着、布留裏
137	SK18	鏡形土器			13.0			口縁部に北極	口縁ハテ後ナデ、体部ハテ	
138	SK18	鏡形土器			20.0			口縁ハテ後ナデ、体部ハテ	口縁ハテ、体部削り	
139	SK18	鏡形土器			17.3	28.9		口縁ハテ後ナデ、体部ハテ	口縁ハテ後ナデ、体部ハテ	外側側面付着、内底削痕、頭部側面削痕
140	SK18	鏡形土器			17.6			ミガキ	本體ミガキ	
141	SK18	鏡形土器						ハ前ミガキ	ハ前ミガキ	
142	SK18	鏡形土器						ミガキ	ハテ後ナデ	杯部内外面・脚部外側赤彩
143	SK18	高野士器						ミガキ	ハテ後ナデ	脚部穿孔3.3方向
144	SK18	高野士器						ミガキ	割り	脚部穿孔3.3方向
145	SK18	鏡形土器						ミガキ		外側側面
146	SK18	鏡形土器						ミガキ		
147	SK18	鏡形土器						ミガキ		赤彩
148	SK18	鏡形土器						ミガキ		
149	SK124	鏡形土器			16.6			ミガキ	ハケ	外側側面付着
150	SK124	鏡形土器			20.0			ナデ		口縁ハテ、体部削り

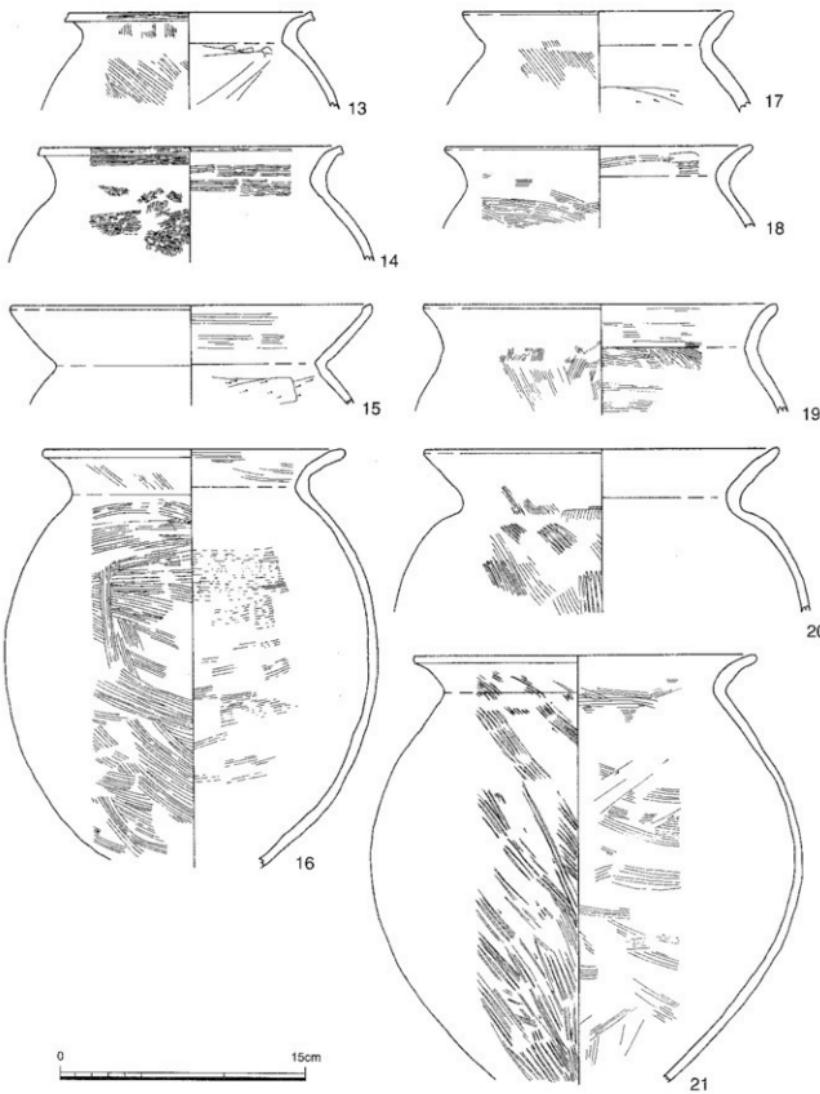
器物番号	遺物番号	遺物名	種類	口径	器高	底径	外 面 調 査	内 面 調 査	特記事項
151	SK124	彫形土器		11.0			口縁・腹部ハケ後ナデ、体部ハケ ハケ		
152	SK124	彫形土器		20.2			口縁・腹部ハケ後ナデ、体部タタキ ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁・腹部ナデ、体部ハケ ハケ後ナデ	口縁・腹部取扱 内面剥げ
153	SK124	彫形土器		18.0			口縁ハケ後ナデ、体部ハケ		
154	SK124	彫形土器		21.4			口縁・半底ナデ、口縁下半体部ハケ タタキ	口縁ナデ、体部削り	内面剥げ
155	SK124	彫形土器					ハケ		
156	SK124	彫形土器		3.0				ナデ	外周剥付層、内面剥げ
157	SK124	高杯形土器		12.2			杯部ミガキ、脚部削り ハケミガキ、脚部ハケ		内外剥れ跡
158	SK124	高杯形土器		9.4	10.5	12.1	ミガキ	脚部削り	脚部穿孔、4方向
159	SK124	高杯形土器				11.2	ミガキ		
160	SK124	高杯形土器		7.6			杯部ミガキ、脚部削り後ミガキ ミガキ	杯部ミガキ、脚部削り ミガキ	内小剥れ跡
161	SK124	器台形土器		9.0			ミガキ		
162	SK124	杯形土器			3.0		体部上半部ハケ、下半部削り ハケ	ナデ	
19	SK146	彫形土器		16.6				口縁ハケ後ナデ	口縁端部剥り
163	SK146	彫形土器		17.2			ハケ	口縁ハケ、脚部削り	
164	SK146	彫形土器		17.2			ハケ		
165	SK146	彫形土器		17.2			ハケ		
166	SK146	彫形土器		15.4			口縁ハケ後ナデ、体部タタキ ハケ後ナデ	口縁ハケ後ナデ	
167	SK146	彫形土器		17.8			口縁ハケ後ナデ、体部ハケ ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	内周剥付層
168	SK146	彫形土器		17.8			ハケ		
169	SK146	彫形土器		17.8			ハケ	口縁ハケ、体部削り	
170	SK146	彫形土器		23.0			ハケ	口縁ハケ、体部削り	
171	SK146	彫形土器		12.8			ナデ	ナデ	
172	SK146	彫形土器		16.4			ハケ	ハケ後ナデ	外周剥付層
173	SK146	彫形土器		19.0			ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	外周剥付層、布留要
174	SK146	彫形土器		16.4				口縁ナデ	外周剥付層、布留要
175	SK146	彫形土器		17.0			口縁ナデ、体部ハケ ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ナデ、体部削り	外周剥付層、布留要
176	SK146	彫形土器		18.0			ハケ	口縁ナデ、体部削り	布留要
177	SK146	彫形土器					ハケ	ハケ	
178	SK146	彫形土器					ハケ		
179	SK146	彫形土器					5.0		
180	SK146	彫形土器					6.4	ミガキ	底部剥離状態

固有番号	測量番号	遺傳	種	類	口径	器高	底径	外 面 調 整		内 面 調 整		付 記 事 項
								削り後ハケ後ナデ	削り後ハケ後ナデ	底面	底面	
20	181	SK146	高杯形土器		18.3							底面
	182	SK146	高杯形土器		12.0			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	底面ミガキ、脚部ナデ
	183	SK146	高杯形土器		10.8			ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	
	184	SK146	鉢形土器		15.8			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	185	SK146	盆形土器		14.6			口縁ハケナデ、体部ミガキ	口縁ハケナデ、体部ナデ	口縁ナデ、体部削り	口縁ナデ、体部削り	外周磨台若
	186	SK146	盆形土器		20.0			ナデ、底面ミガキ	ナデ、底面ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	187	SK146	壺形土器		11.3			調節ナデ	調節ナデ	ハケ	ハケ	
	188	SK164	壺形土器		16.0			4.6	体部ミガキ、底部ナデ	体部ナ半削り、下半遮ハケ	ハケ	
	189	SK164	壺形土器		20.0			ハケ後ナデ	ハケ後ナデ	口縁削痕取り、内外面削付	口縁削痕取り、内外面削付	
	190	SK164	壺形土器		18.4			口縁削痕取り、口縁ハケ後ナデ	口縁ハケ後ナデ、体部ナデ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁削痕取り、外面部全体削付
	191	SK164	壺形土器		17.0			「横」ハケ後ナデ、体部ミガキ	「横」ハケ後ナデ、体部ミガキ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁削痕取り、外底部焦げ
	192	SK164	壺形土器		18.0			口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	
	193	SK164	壺形土器		25.3			「横」ハケ後ナデ、体部ミガキ	「横」ハケ後ナデ、体部ミガキ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	
21	194	SK164	壺形土器		18.0			口縁ハケ後ナデ、体部ミガキ	口縁ハケ後ナデ、体部ミガキ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	
	195	SK164	壺形土器		18.0			「横」ハケ後ナデ、体部ハケ	「横」ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	
	196	SK164	壺形土器		20.0			口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	口縁ハケ後ナデ、体部ハケ	
	197	SK164	壺形土器		5.0			調節ナデ	調節ナデ	ハケ	ハケ	右前塞
	198	SK164	壺形土器		9.0			ハケ	ハケ	ハケ	ハケ	
	199	SK164	高杯形土器		9.8			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	200	SK164	高杯形土器		7.8			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	脚部削り
	201	SK164	高杯形土器		12.4			ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	内外面刮痧
	202	SK164	高杯形土器		7.7	4.2		ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	
	203	SK164	盆形土器		16.0			ハケ	ハケ	体部削り	体部削り	部位要削
	204	SP26	壺形土器		13.6			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	7℃前半
	205	SD 1	直筒形土器		5.5			ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	底部底部角切削
	206	SD165	土器磨台台杯		4.3	6.0		ナデ	ナデ	ナデ	ナデ	底部底部角切削
	207	SK30	須彌輪台杯		18.0			ナデ、体部下半部削り	ナデ、体部下半部削り	平行線当て具	平行線当て具	内外面削付、12℃前半
	208	SE170	瓦質土器斧鎗		20.0			体部下半部削り	体部下半部削り	体部下半部平行線当て具	体部下半部平行線当て具	内外面削付、12℃前半
	209	SE170	瓦質土器斧鎗									

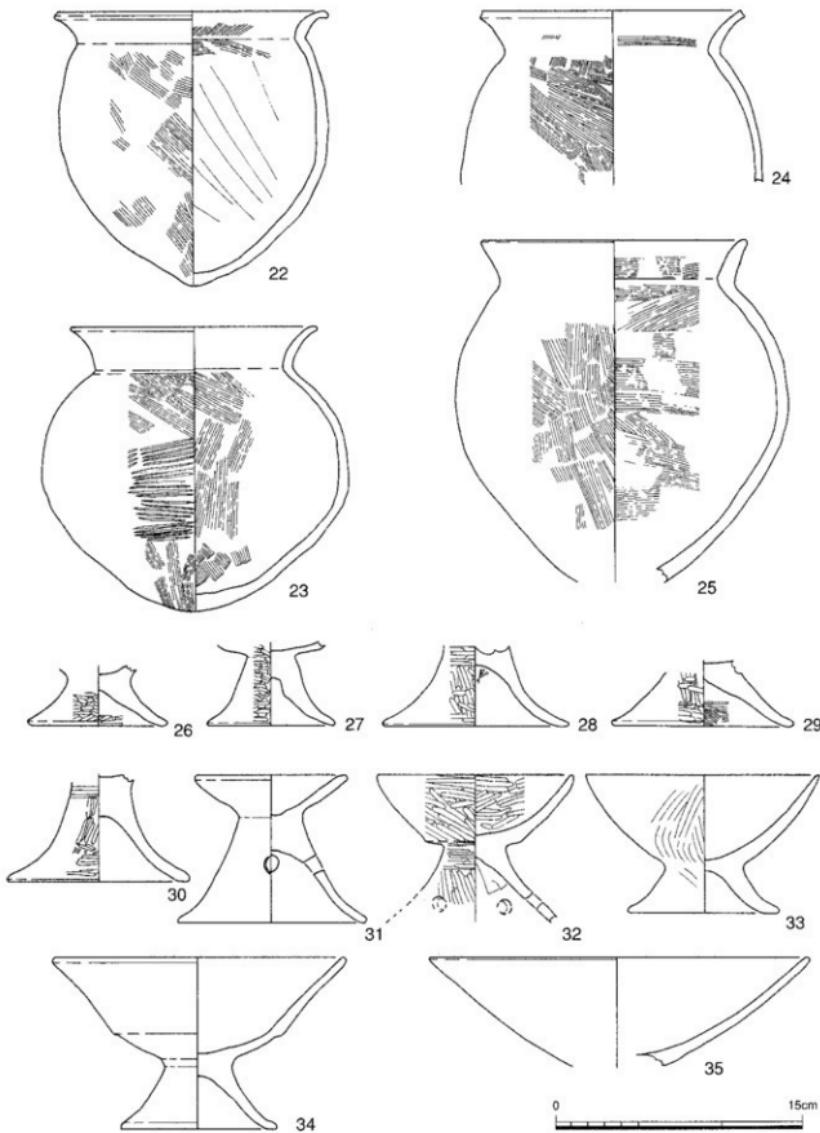
1号墳周溝



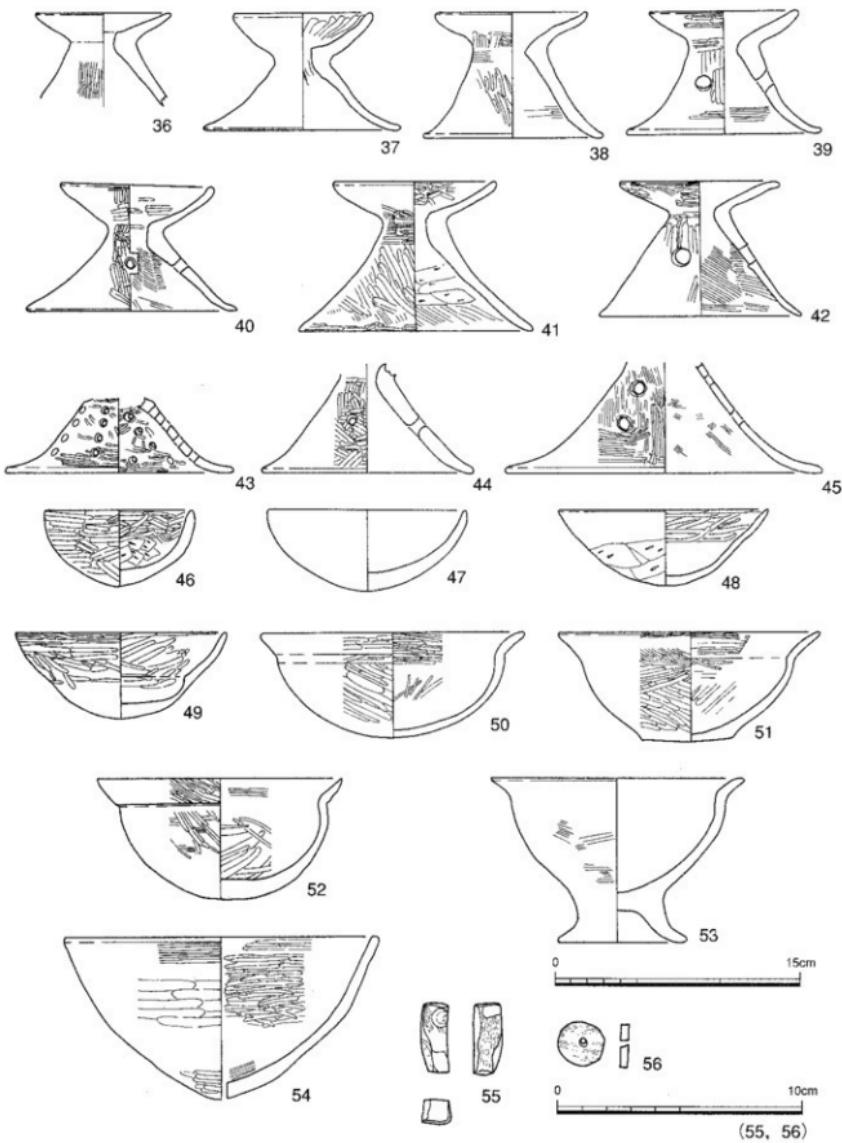
第8図 出土遺物実測図(1)



第9図 出土遺物実測図（2）

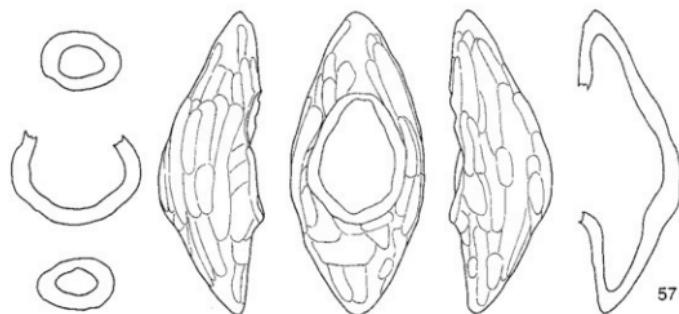


第10図 出土遺物実測図(3)



第11図 出土遺物実測図(4)

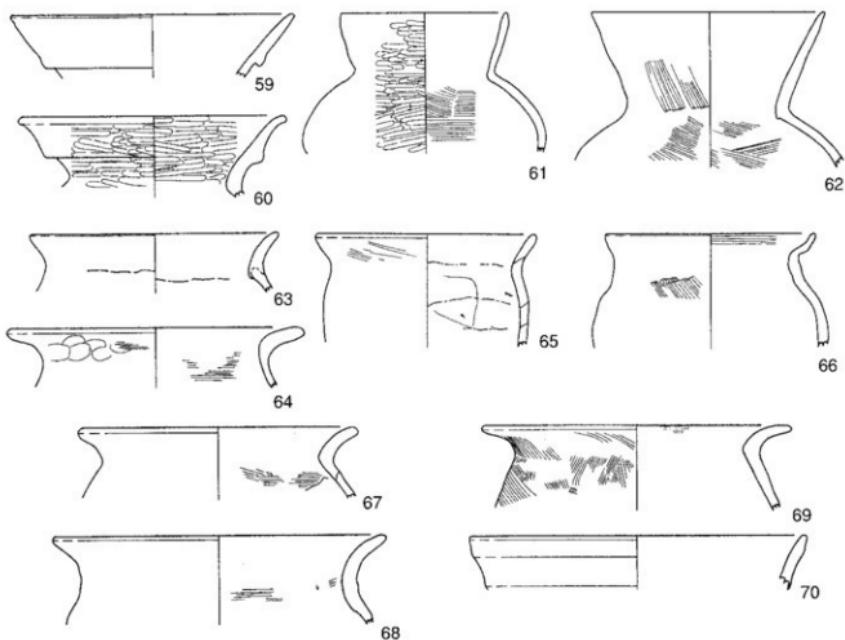
SD2



57

10cm
(57)

SD3



59

61

62

60

64

66

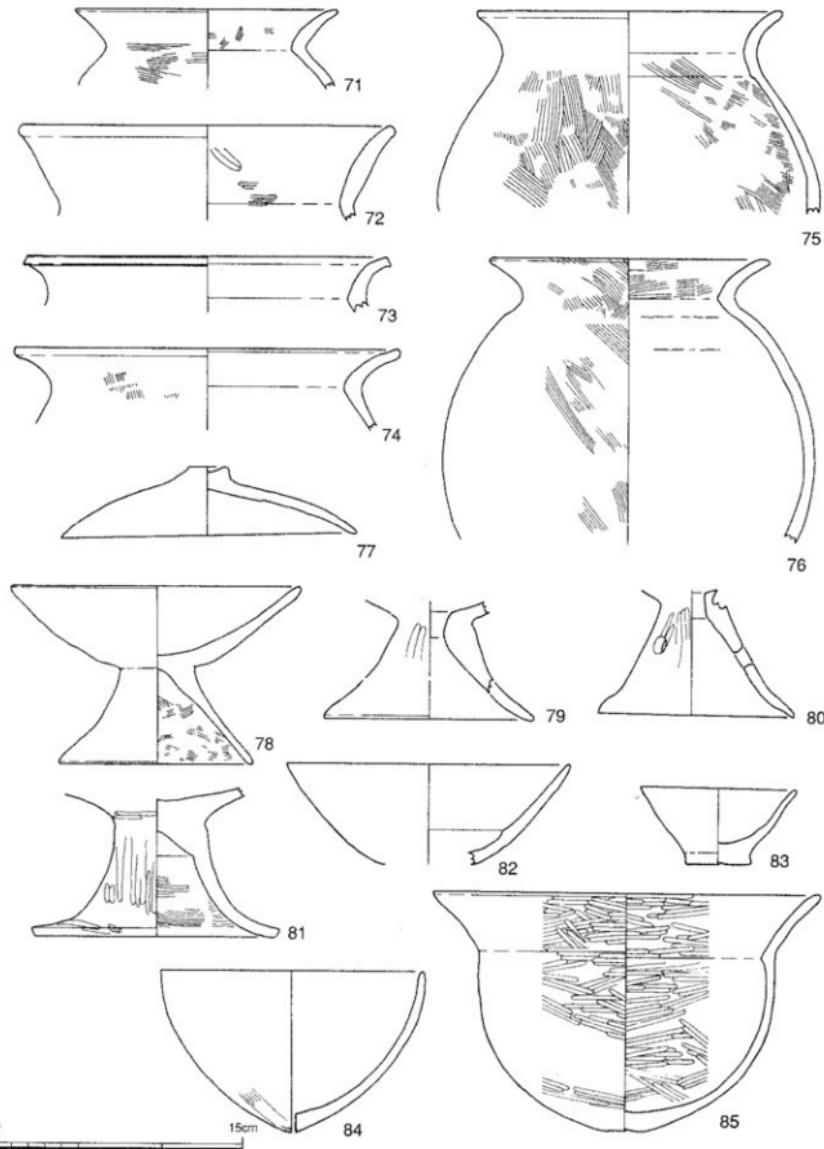
67

69

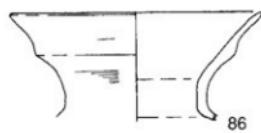
68

70

第12図 出土遺物実測図(5)



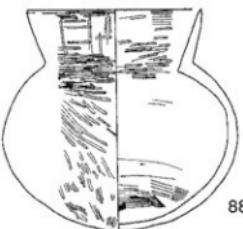
第13図 出土遺物実測図(6)



86



87



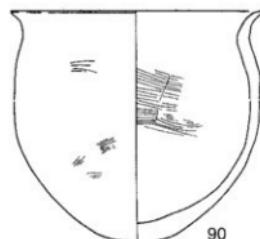
88



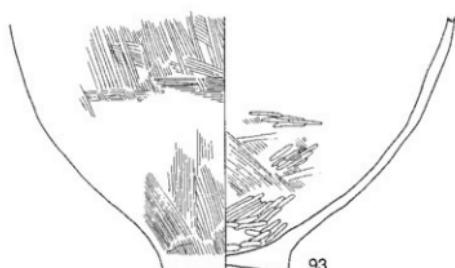
89



92



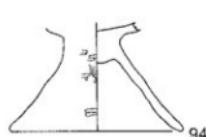
90



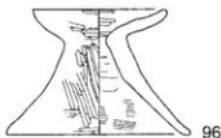
93



91



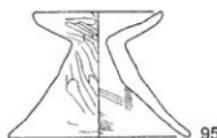
94



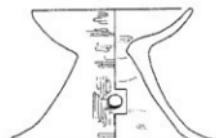
96



98



95



97

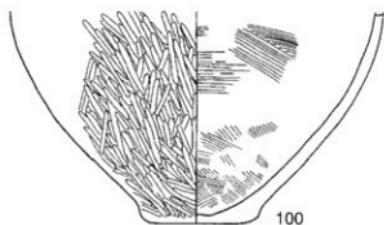


0

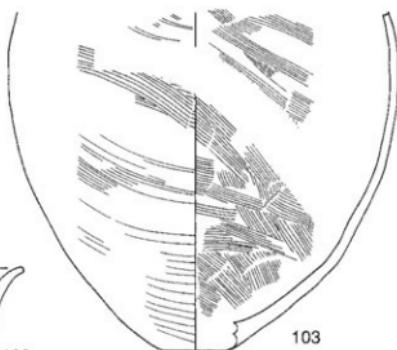
15cm

第14図 出土遺物実測図(7)

SD103



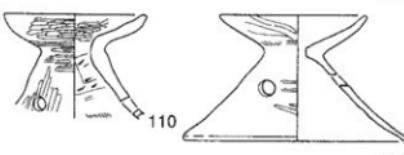
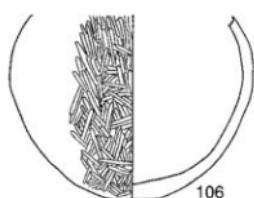
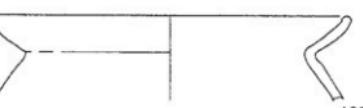
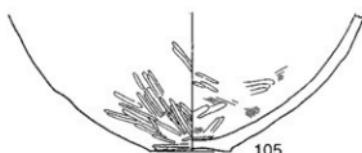
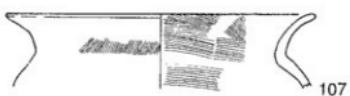
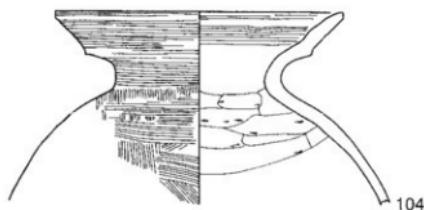
SE33



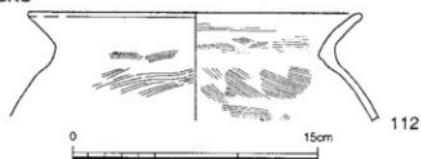
SB60



SH100

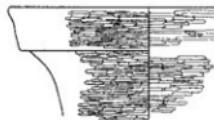


SK6



第15図 出土遺物実測図(8)

SK8



114



115

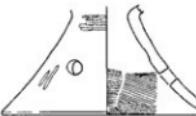


116

SK9



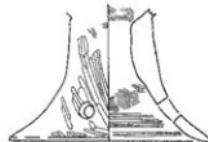
117



118



119



120

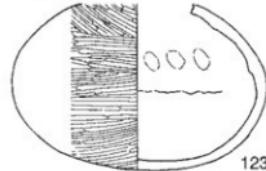
SK10



121



122

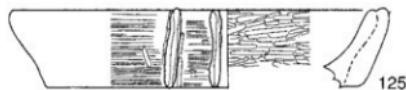


123

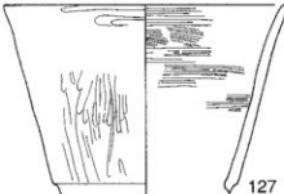
SK118



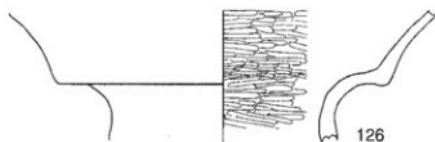
124



125



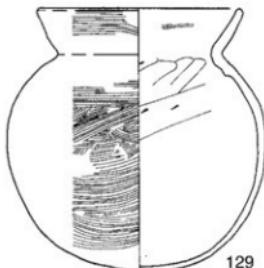
127



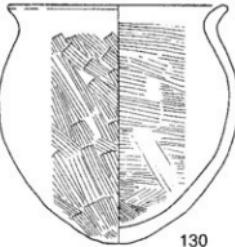
126



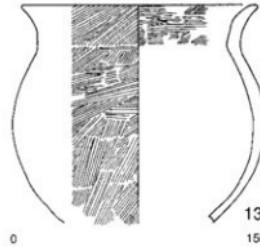
128



129



130

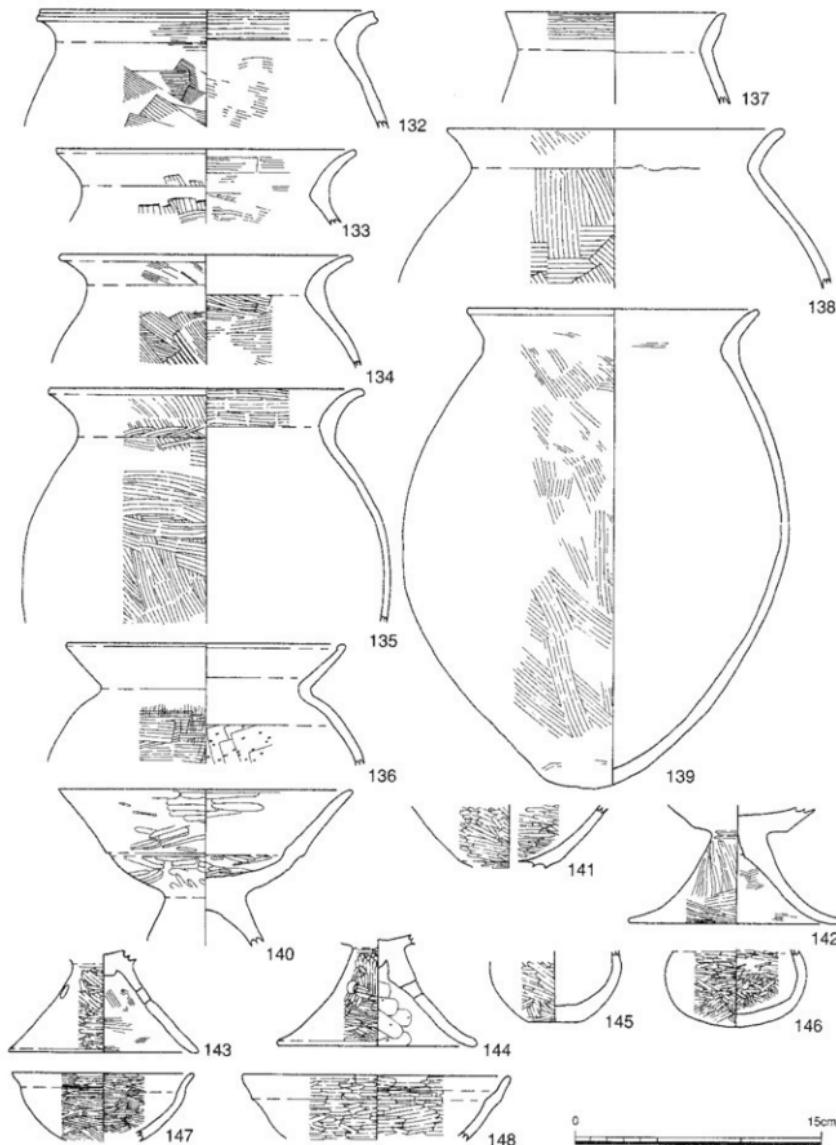


131

0

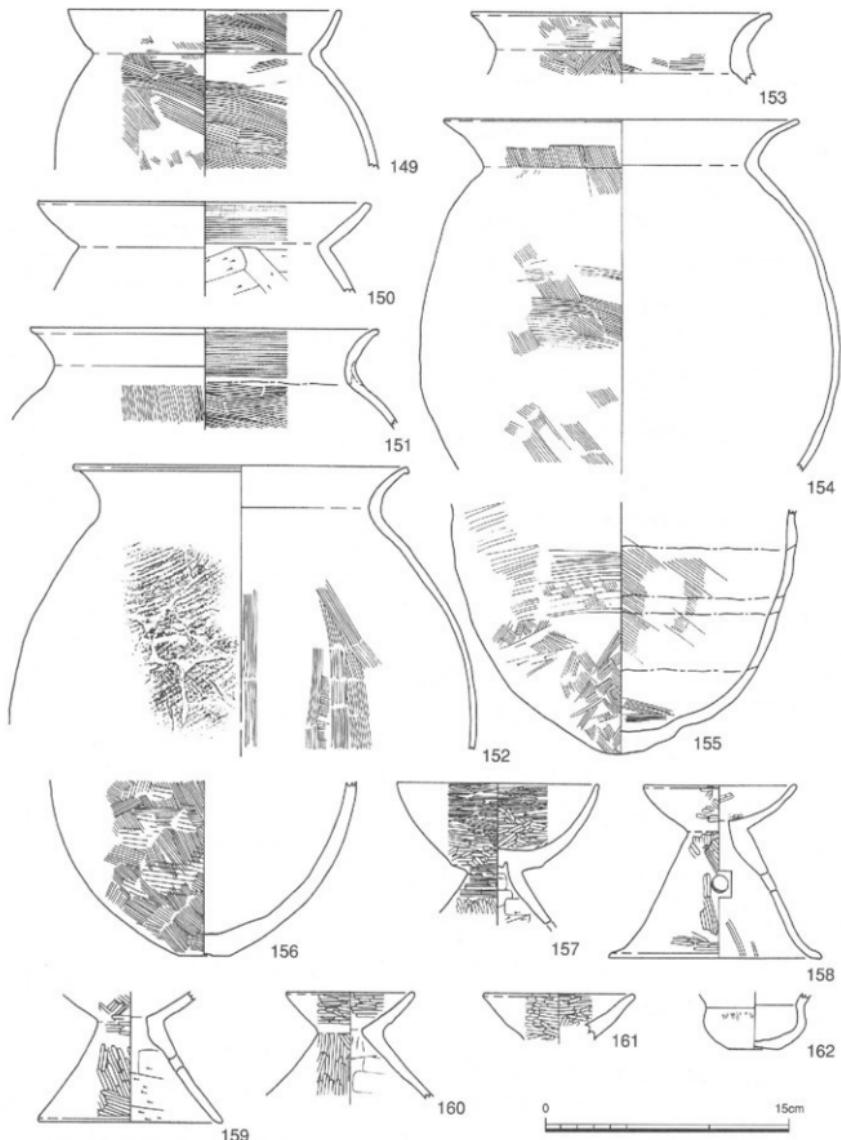
15cm

第16図 出土遺物実測図(9)



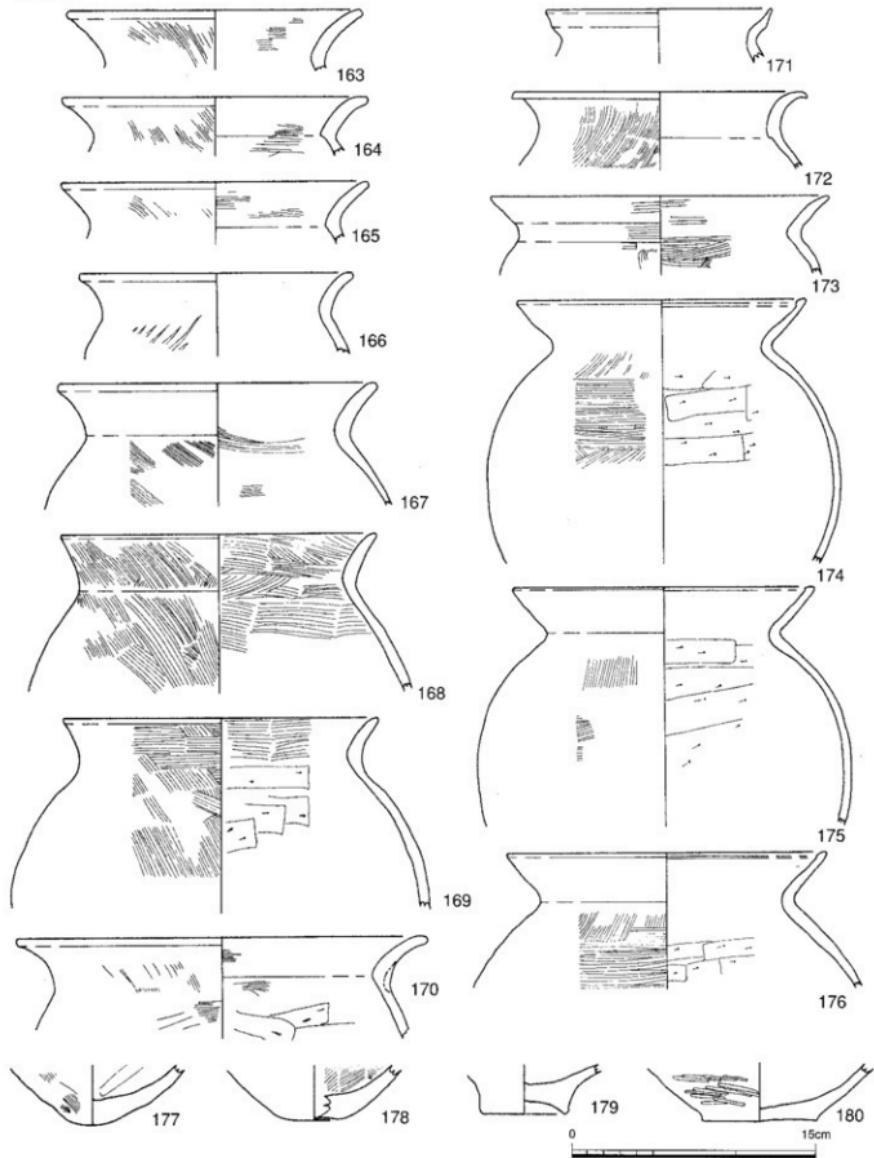
第17図 出土遺物実測図 (10)

SK124

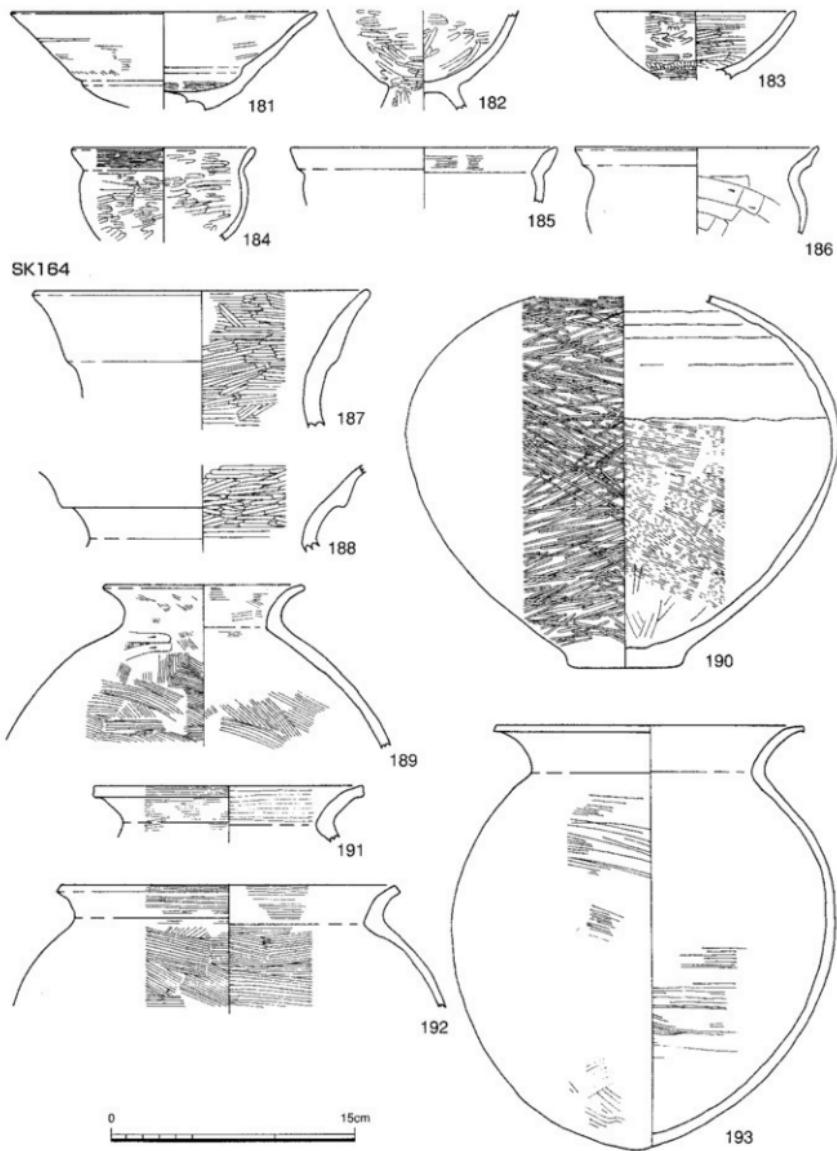


第18図 出土遺物実測図 (11)

SK146

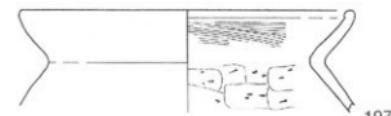
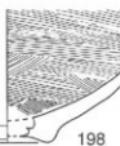


第19図 出土遺物実測図 (12)

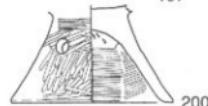


第20図 出土遺物実測図 (13)

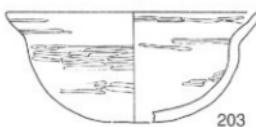
SK164



199



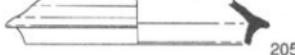
202



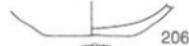
SP26



SD1



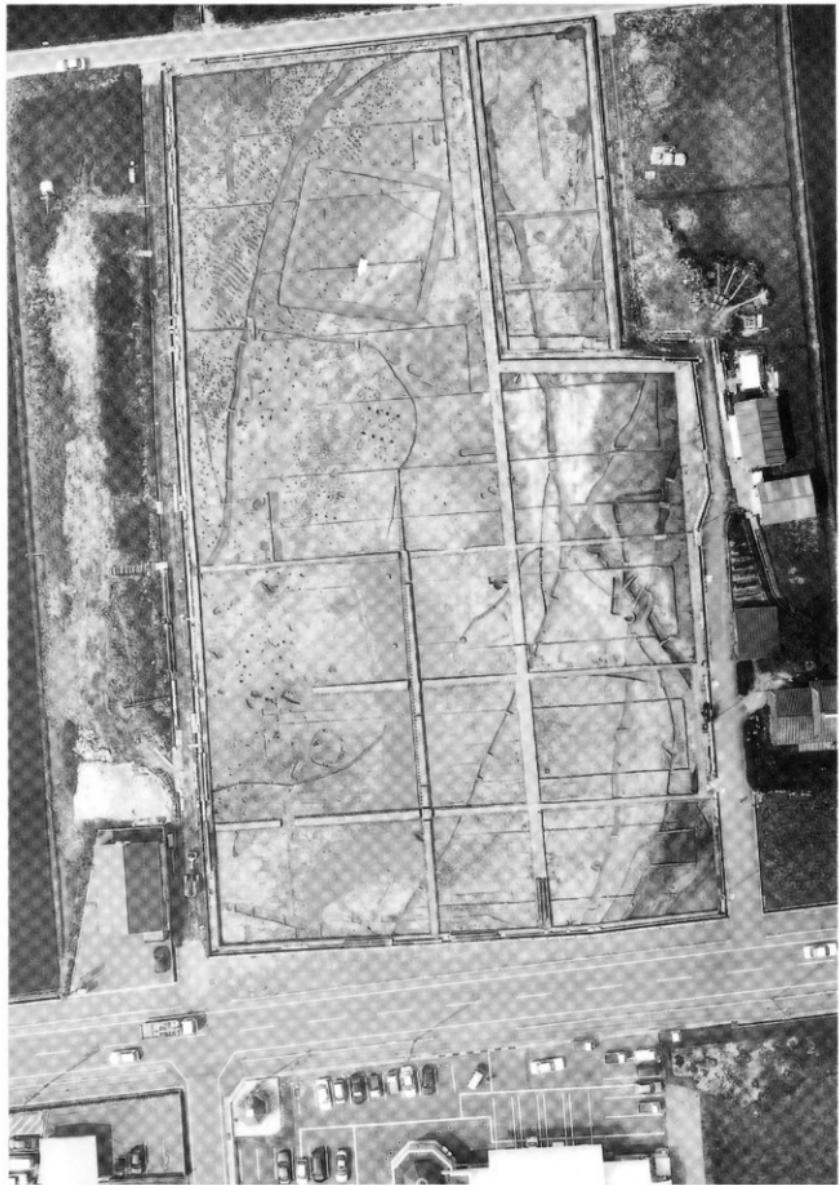
SD165



SK30



第21図 出土遺物実測図 (14)



写真図版1 垂直写真

作業風景



作業風景



古墳周溝層序



写真図版 2

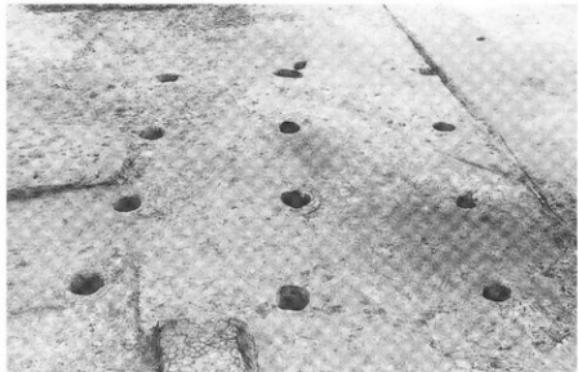
古墳周溝層序

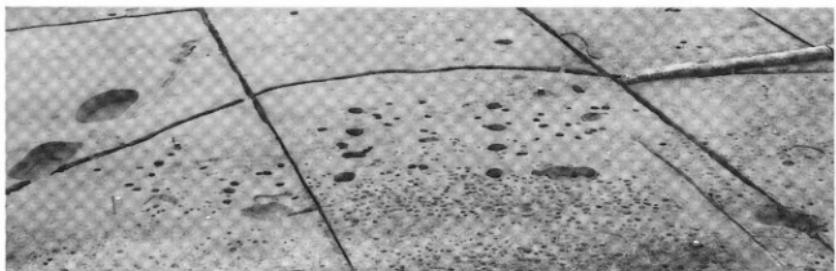


SB43全景

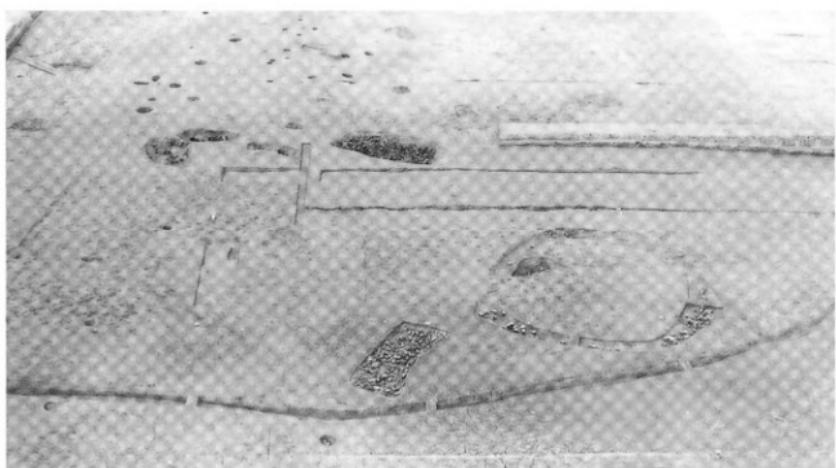


SB57全景





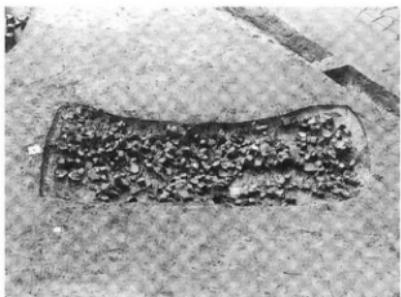
SB56全景



SH100・SK146遺構配置



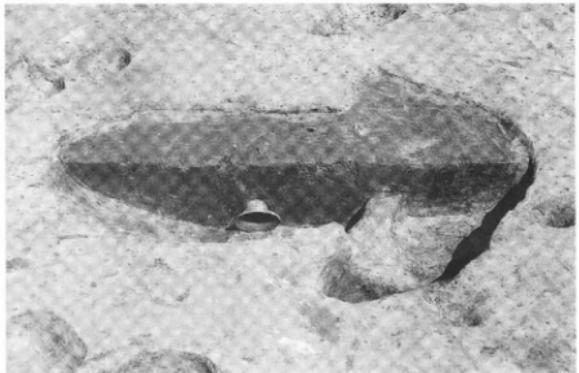
SK118遺物出土状況



SK146遺物出土状況

写真図版4

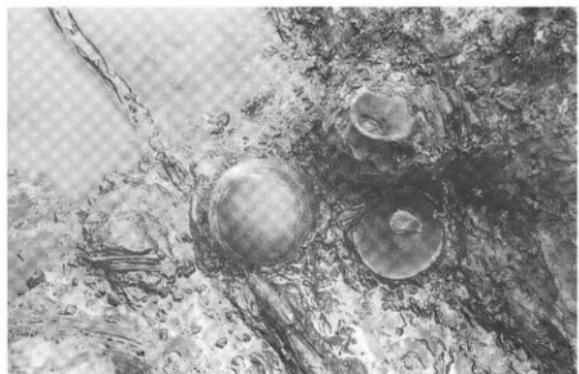
SK9半裁状況



SD2遺物出土状況

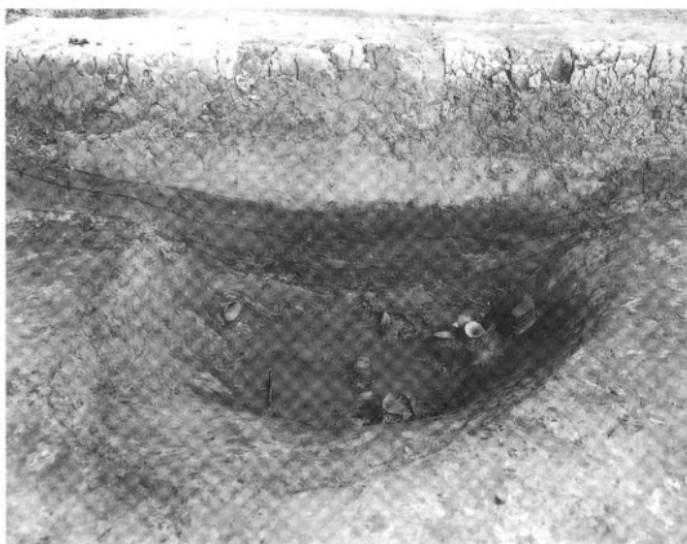


SD3遺物出土状況





SB70全景

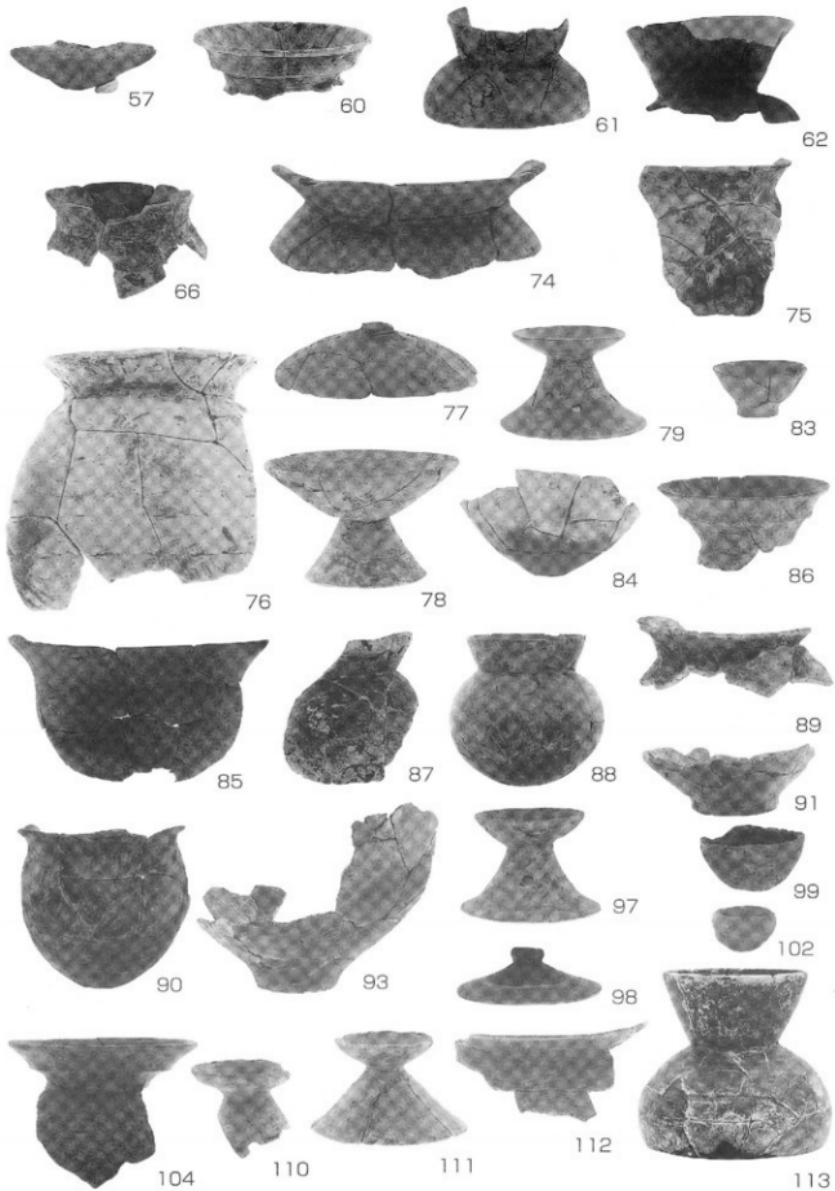


SK164掘削状况

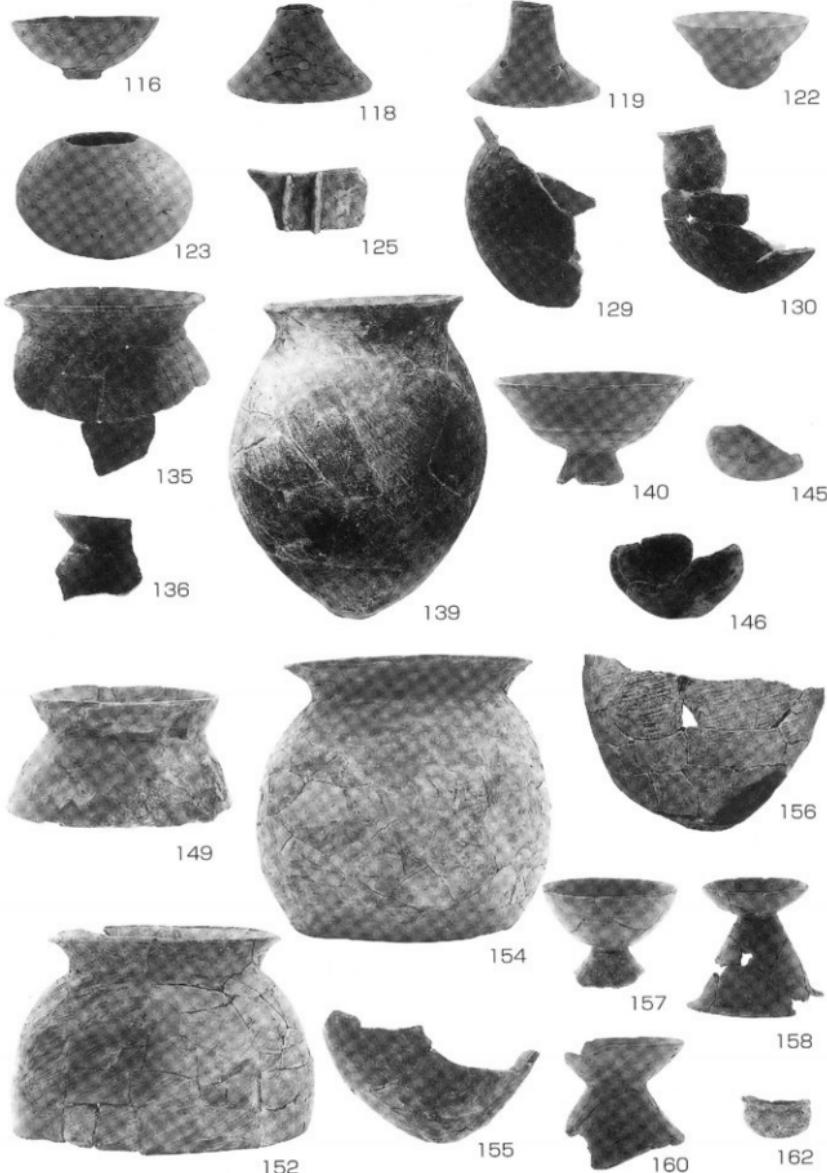
写真图版 6



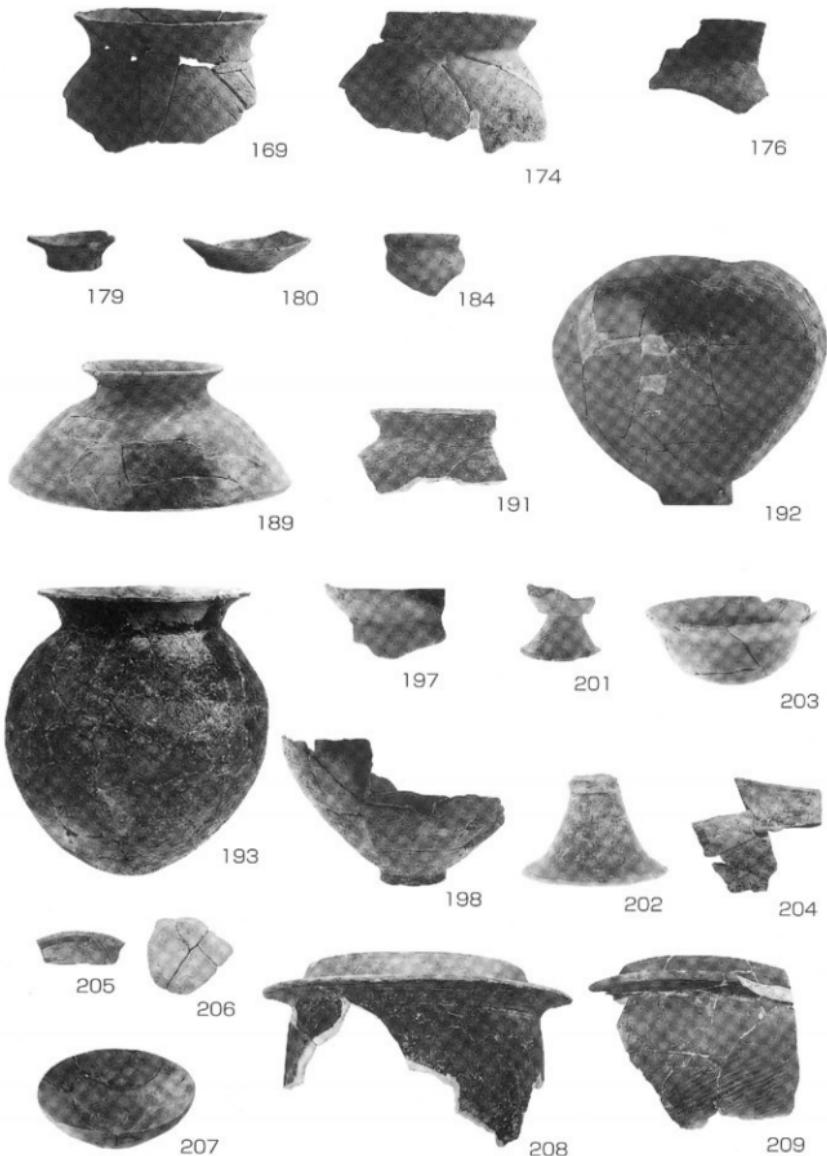
写真図版7 出土遺物（1）



写真図版 8 出土遺物 (2)



写真図版9 出土遺物（3）



写真図版10 出土遺物（4）

報告書抄録

ふりがな	ふたくちあぶらめんいせきはつくつちょうきがいほう						しうがわうがんかいしゅうかんれんじゅうたくだんちじょうにかかるちょうさ
書名	二口油免遺跡発掘調査概報						一庄川右岸改修関連住宅団地事業に係る調査
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	13						
編集者名	尾野寺克実・中井英策						
編集機関	大門町教育委員会						
所在地	〒939-02 富山県射水郡大門町二口1081 TEL0766-52-6964						
発行年月日	1998年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査原因
		市町村名	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		
ふたくちあぶらめん 二口油免	だいもんまちなかむら 大門町中村	163821	382048	36° 43' 21"	137° 03' 29"	19960513 ～ 19970731	庄川右岸改修関連住宅団地事業 に係る調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物		特 記 事 項	
二口油免	古墳・集落	弥生・古墳 奈良・平安	古墳周溝・溝 土坑・穴 掘立柱建物	弥生土器・須恵器 土 師 質 土 器		古墳時代前期の方墳 確認(墳丘は消失し、 周溝のみ遺存)	

大門町埋蔵文化財調査報告 第13集

二口油免遺跡発掘調査概報

—庄川右岸改修関連住宅団地事業に係る調査—

発行日 平成10年3月

発 行 大門町教育委員会

編 集 大門町教育委員会

印 刷 ㈱立業社高岡

